STIR

ステア ISSN-0286-3634
1985 SPRING VOL.15

世界のホテル・バー⑭

"ル・グラン・バー" ル・グラン・ホテル、ローマ
"LE GRAND BAR", LE GRAND HOTEL, ROME

HBA
全国ホテル・バーメンズ協会

特集 バイオテクノロジー

「バイオテクノロジー」という言葉が専門学術書の中から抜け出し、日常会話の中で交されるようになってきた。しかし、そもそもバイオテクノロジーとは何だろう。その広い範疇のためか、最先端技術ゆえか、いまひとつ漠としている。華々しく技術が先行し、21世紀をバラ色に変えるかのような評価すらあるが、はたして子孫への福音なのか、バベルの塔なのか。時という流砂に棹さして、人間の生命にも深く係わってくるこのテーマについて考えてみたい——。

バイオテクノロジーとは

木原弘二（慶応義塾大学医学部教授）

冬のさ中にあって、トマトやキュウリの盛り込まれたサラダが食卓に上るのは、今日では日常のこととなっている。しかし、ほんの二、三十年以前には、夏の野菜を冬に見かけるなどというのは、極めて異常なことであったように思う。

正確なことをしらべた訳ではないが、特別な機会には、その頃でも温室で育てた野菜や果実を手に入れることができたことであろう。もっとも大きな相違は、今日では、ほとんど、どの八百屋の店先にも並んでいるという点である。このような変化の理由として、驚天動地の変革があったとは聞かされていない。もちろん、現実に生産につとめている人たちが、いろいろと改良・工夫の努力を積み重ねられた結果であろう。しかし、もっとも大きく影響があったのは、塩化ビニールというプラスチックが大量に生産され、手軽に手に入るようになったことであろう。

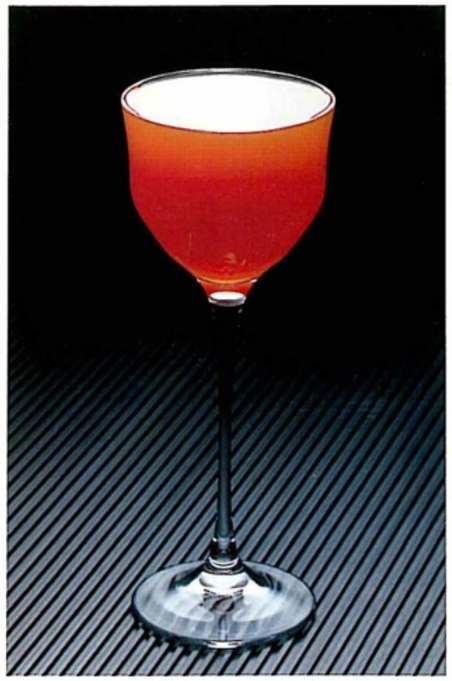
冬のさ中に夏の産物を口にすることは、豊かな季節感を重んじている人には、心外なことかもしれない。しかし、冬に苟を掘り出したり、滝の水を銘酒に変えた孝子の熱意に示されているように、季節外れの珍奇なものを味わってみたいという望みが、ほんの数十年の間に、日常のこととなってしまったのである。

つまり、以前から夢のようなこととして心に描かれてはいたが、とうてい実現できそうにないと諦められてしまっていたことが、新しい合成樹脂という素材の出現によって、現実のものとなったということができる。月にまで宇宙飛行士が旅行したり、十センチほどの円盤に一時間近くもの大曲を収め込んだりできる世の中なのである。一本の樹(?)に数千個のトマトを実らせたりすることもできるような現代の技術をもってすれば、今世紀初頭には実現不可能とされていたことが、つぎつぎと目の目を見るようになっていくのは、不思議でもなんでもないことといってよい。

今日、あたり前のこととして定着し切ってしまったようなことも、改めてふり返ってみると、それがほんの十年とか二十年以前には大事件として報道されていたことであることに気がつく。そして、このような変化が定着し切っていることは、その実現への願望がいかに根強いものであったかを物語っているといってよいであろう。このような願望の前には季節感へのあこがれとか、月にかぐや姫の館を夢みた詩的な情緒などは、一顧も与えられないことなのかもしれない。

最近、話題としてしばしば取り上げられるバイオテクノロジーについても、数十年といわず、数年以前には本気になって考えられもしなかったものの、心の奥底でそっと押し殺されていた願望が、明るみに出されようとしていると考えてよいであろう。

言ってみれば、心臓移植とか腎臓移植というのは、秦の始皇帝が求めたという不老長寿の薬への



■シティ・オレンジ
第12回HBA創作カクテルコンペティション優勝作品。ダーク・ラムをベースに、コアントロー、オレンジ・ジュース、レモン・ジュースを加えたカクテル。ビビッドで小粋なオレンジ色は、都会の夜が似合う女性をイメージしたという。

●特集　バイオテクノロジー
「バイオテクノロジーとは」木原弘二——1
座談会「バイオテクノロジーとモラル」——4
「生命と生活とモラルについて」沢田允茂——18

●Fragrance of Spirits and Talks　ステア対談——22
徳間康快vs藤真利子

●STIR ESSAY　酔狂雑記——⑮——27
「続・美意識、右往左往」早川良雄

●BEYOND THE HORIZON　地平線綺譚——⑩——28
「現地集中思考法のすすめ」三輪主彦

●世界のホテル・バー——⑭——30
"ル・グラン・バー、LE GRAND BAR"
LE GRAND HOTEL,ROME

●a story of "THE BRANDS"——36
世界の銘酒——⑮
「バロン・ドゥ・L」

●STIR ESSAY　諸国雑記——⑮——40
「ロワール紀行」今井　清

●HBA REPORT——41
「第14回HBA創作カクテルコンペティション」

●The Artisan Spirit　ステア・インタビュー——44
第14回HBA創作カクテルコンペティション優勝
君島孝司（赤坂プリンスホテル）

●for a NIGHTCAP

願望の、部分的な実現のようなものであろう。このような臓器移植が大きく話題となったのは最近のことではあるが、ほとんど同じことと考えてよいことは、ずっと以前から実施されてきている。血液型についての知識が不十分であったために、ヒツジなどの動物の血液を利用して、悲惨な結果を招いたりしながら完成されてきた輸血のことを言っているのである。失われたもの、あるいは、十分な働きを果たすことができなくなった部分を、新しい丈夫なもので置き換えるというのは、機械づくりの上での基本的姿勢であった。それが、私たちの身体の部品についても実施できるようになったと、割り切って述べてみても、あまり本筋から外れた表現であるとして叱り飛ばされることもないであろう。

現在のところ、世界中でこのような臓器移植によって、予想された死を回避するという恩恵に浴した人の数は、それを望みながら幸運に恵まれなかった人、あるいはこのような手段の存在すら知らない人に比較すれば、微々たるものでしかない。実際にこのような技術が確立されていても、数十年以前に冬のさ中にトマトやキュウリを味わうことと同じで、誰もがいつでも体験できることではない。しかし、確立された技術が繰り返して実施されていく間に、改良が加えられ、新しい様式へと開発・発展してゆくとともに、普及のていどがさらに広くなることが考えられる。

自分たちにとって都合のよくない事情を改良し、望ましいとされる点をさらに増進させたいという願いは、遺伝的に決定されている特徴を人為的に変えてみようという企てにまで伝がつたえていて、このような企てが、単なる夢物語としてではなく、まじめに考えられるようになってきている。一度生まれてきてしまえば、遺伝的に決定された特徴を改変・修正するなどというのは、生物学の教えるところをまったく無視してしまうことになるのだが、実は、遺伝的特徴を決定しているしくみが明らかにされてきた結果、このような遺伝への介入を、部分的に実際に果たすことができるようになった。

血友病や色盲などをはじめとして、数百種類以上の遺伝病が知られていて、その中のほんの一握りのものでは、その遺伝病の結果として生じる不都合な事態を、栄養の制御などで回避することができる。しかし、他の大多数の遺伝病については、苦痛を少しでも和らげるような努力の外には、何の手段も見出されていないのが現状である。もし、遺伝病を決定している遺伝子に対して、人為的に不都合な部分を除去したりできるようになれば、このような事態を一挙に解決することができる。

残念ながら、ヒトという生物種の遺伝子に対して、何らかの修正を考えるというのは、現在遺伝子操作とか遺伝子工学とか呼ばれている分野の方向について、ずっと先のほうを見越して、いくつかの点での問題が解決されたとしたら、やがては可能性があるであろうという、かなり誇張した予想である。しかし、確かに、いくつかの問題点が解決されたら、という条件つきであり、これらの問題はいずれも困難なものではあるが、このような望みが達成される方向への第一歩は踏み出されているといってよいであろう。

遺伝子操作に期待が寄せられているもう一つの点は、品種改良に関係している。数百年にわたって植え重ねられてきた交配による品種改良ではなしに、一定の特徴を決定している遺伝子を除去したり、他の遺伝子を追加したりして人為的に望ましいとされるものをつくり出そうというのである。

十年ほど以前に、アメリカ科学振興財団の機関誌に、窒素固定に関係する遺伝子を、窒素固定のできる菌から、そうでない菌に入り込ませることができたという報告があった。このときには、またまこのような菌が見出されたという内容で、人為的に遺伝子を入り込ませたわけではない。しかし、もし、このようにして、いろいろな細菌で空中の窒素が有機化合物の形に変えられるとしたら、当時、毎日二百万バレルの石油にあたる電力を消費して窒素肥料を生産していたのが、一挙にそのかなりの部分を節約できるようになるというのが、その論文の冒頭の言い分であった。

窒素固定に関係している一群の遺伝子についての研究は、現在でも熱心に進められているが、その働きのしくみがかなり複雑なために、現在でも窒素固定菌を人為的につくり出して、肥料を節約する目的に適した条件をつくり出すことには成功していない。しかし、もっと単純な形で働く遺伝子については、一方の菌からの遺伝子を別の菌に入り込ませるとか、ネズミやニワトリ、ヒトの遺伝子を大腸菌に入り込ませて、その働きの様子を探ることができる。

ヒトのインシュリンや成長ホルモンを決定している遺伝子を取り出してきて、これを大腸菌の中に入り込ませて、そこで遺伝子が働きを示して、ヒトのインシュリンや成長ホルモンを合成させることに成功したと報道されたのは、もう何年か以前のことである。このような研究は、ここ十年ほどの間にいちじるしい発展を遂げた。ホルモンの合成などの実際的な面も関係しているが、大多数の研究は、ヒトの遺伝子の構造、働きを明らかにするためのものであったといってよい。

このような研究で進められている実験の内容を紹介するとなると、かなり面倒なことになる。しかし、結局のところは、このような一連の研究に必要な実験室の設備、器械、試薬などが普及してきて、ひと昔前よりもずっと簡単な装置が開発され、品質も向上してきたために、あるていどの基礎的な施設が整備されている研究室では、ほとんどどこでも、この分野の研究に参加できるようになった結果であるということができる。

たとえば、一定の遺伝子の部分を取り出してくるためには、制限酵素と名づけられている一群の酵素が必要である。この酵素で、遺伝子であるDNAを切断し、生じた断片の中で、求めている遺伝子を抱えているDNA部分を、他のDNAから選り分けてくるのである。この制限酵素が三十種類あまり市販されていて、一回の実験に必要な量の数十倍から数百倍ていどの量で、制限酵素の種類により違うが、数万円ていどで入手できる。これらの酵素を自分の研究室で精製しながら研究を続けていたのでは、とても現在のように続々と新しい研究が発表されるということは考えられない。

ある特定の遺伝子を抱えているDNA断片を選り分けてと書いた文が気になることはないと思うが、それほどDNAという言葉が、たびたび新聞の解説などで登場してきたからであろう。しかし、DNAという物質が遺伝子との関係で関心を集めるようになったのは、約四十年以前のことといってよい。この間に、DNAについての知識、それを取り扱う技術の進歩は著しく、その結果、一定の遺伝子を抱えている断片、たとえば、インシュリンを決定している遺伝子を、他の遺伝子と区別して、このDNA部分を選り分けることができるようになった。ヒトの細胞では、どの細胞にも一兆分の四グラムという量のDNAが、細胞核の染色体上に含まれている。この量は、ごくごく微量であるという印象を与えるであろうが、それでも、この上に、約五万個の遺伝子が含まれていて、このDNAを制限酵素で切断すると、平均の大きさの遺伝子を指定しているDNAの断片が、百万種類ほど生じる。この中から、インシュリンならインシュリンを指定している遺伝子部分だけを精製しようというのだから、大変な技術上の工夫が必要である。そして、このような努力を重ねて精製したDNA断片を、必要なときに必要なだけ得られるようにするためには、ちょっとした細工をして、この部分が大腸菌の中で増殖できるような形に変えて、このDNAの入り込んだ大腸菌として保存しておけばよい。必要なときには、この大腸菌を増殖させて、そこからDNAを精製して、大腸菌の中で増殖できるようにするために細工をした部分を切断してしまうと、最初にヒトのDNAから苦労して選り分けた断片が得られる。大腸菌からの場合には、他のDNAと選り分けるのが、すこぶる簡単にできるように、初めから細工をしておいたのだから、ヒトの細胞のDNAからの場合とは問題にならないほど簡単である。

このようにヒトの遺伝子を入り込ませた大腸菌で、この遺伝子が本来の働きを示して、インシュリンなどが合成されるようにする条件を探さなければならない。インシュリンの合成が効率よく進行するように条件を改良する必要もある。できることなら、このような産物を、大腸菌の菌体成分から精製する必要をなくするために、これらの求める産物が菌体外に放出されるような条件が見出されれば、菌体と培養液とを分けるだけで、ほとんど精製できることになる。

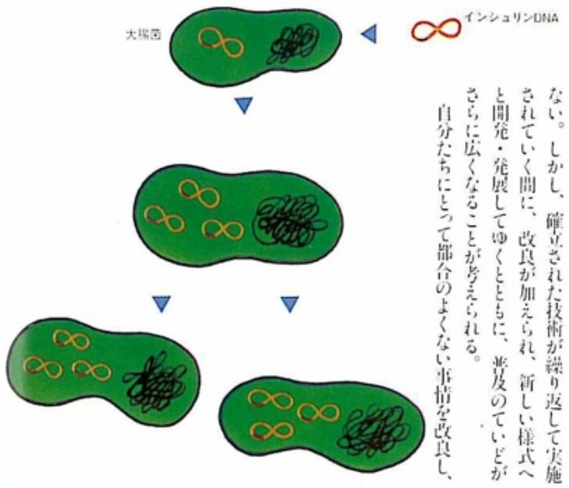
大腸菌は取り扱い易い材料であるが、酵母やその他の植物細胞、あるいは動物の培養細胞やヒトの細胞にも、異なった種類の細胞からのDNAを入り込ませて、そこで、そのDNA上の遺伝子が働くようにすることができるであろうか？　このような実験が、どの種類の遺伝子についても確実に成功するとなったときに、遺伝病の場合についてが応用するときには、細胞の種類の選択、細胞を身体の中へ埋め込むのか血液中に注入するのかなどの問題も解決しなければならない。だから、ヒトの遺伝子を大腸菌の中で取り扱うことと、それを望ましいとされる状況をつくり出すために、思いのままに操作できるということとの間には、大きなへだたりがある。

最後に、DNAが遺伝子であると確かめられた約四十年前に、ある遺伝学者が、これで、望ましいとされる遺伝的な特徴を、思いのままに組み合わせることへの第一歩が踏み出されたと述べている。そのときの実験というのは、一定の特徴を示す細菌のDNAを、その特徴を示さない菌に入り込ませて、その結果この特徴が移し込まれたというものであった。

現在の遺伝子操作の実験と、この実験との差は、その頃は、細菌のDNAをまるごと入り込ませていたのに対して、現代の実験では、特定の遺伝子だけを入り込ませるようにしているという点である。つまり、もっとも現代的なバイオテクノロジーである遺伝子操作にしても、その求めているものへの夢は、遠い昔、その可能性がほとんど手の届かない頃に芽生えていた願望が具体的な形をとるようになったのだといってよいであろう。

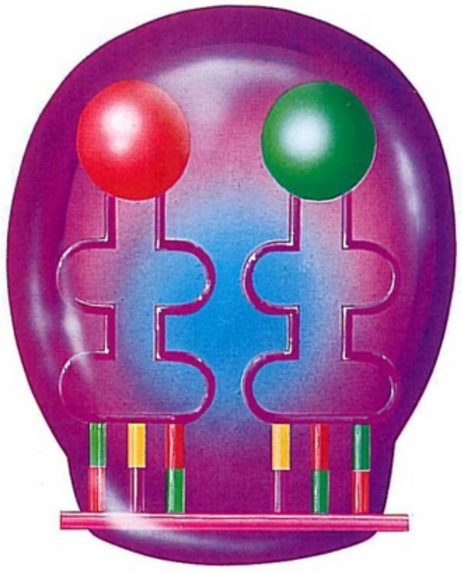
〈遺伝子の組み換え〉

たとえば、マウスの細胞からDNAを取り出し、切断してインシュリン遺伝子を精製
これを大腸菌の中に組み込み、大腸菌を増殖させる。その大腸菌でインシュリンが合成される



バイオテクノロジーとモラル

特集
バイオテクノロジー



沢田允茂（慶応義塾大学名誉教授）

木原弘二（慶応義塾大学医学部教授）

我妻　堯（国立病院医療センター医長）

長野　敬（自治医科大学生物学教授）

"バイオテクノロジー"の概念

沢田――この座談会は"バイオテクノロジーに関する問題をめぐって"ということなのですが、"バイオテクノロジー"という言葉は、今、はやっていて、いろいろな本の題名にもつけられていたりします。ただ、一般の人がバイオテクノロジーという概念を思い浮かべるときには、体外受精とか人工授精、臓器移植まで含めた、そういうことばかりが前面に浮かんできているように思われます。しかし、実際には"バイオテクノロジー"という言葉は、もっと広く、現実には農業、畜産あるいは食品工業などでも使われています。私たちが食べている牛をどのようにたくさん生ませるかとか、どういうふうにして美味な新しい種類の野菜を作るかとか、乳酸菌などで新しい飲み物を作るなどというようなことでも使われているわけで、そういう広い意味で使われているものなのだということをまず理解しておいていただかないといけません。ただ、人間の体外受精とか人工授精というジャーナリズムで問題になるようなものばかり取り上げていると、論点を逃してしまうということもありうるだろうと思います。最初に、みなさんに"バイオテクノロジー"とはいったいどういうふうにして起こって、その言葉や概念がどのように起こり、実際にはどこまで広い領域をカバーしているのか、ということについてのご意見を伺いたいと思うんです。

木原――いやあ、よくわからないんですが(笑)。最近そういう言葉がいろいろな形で言われていることは確かですね。やはり二十世紀初頭くらいから生物学の知識や技術というものが非常に進み、その進歩がたいへん速かったものですから脚光を浴びたという感じなのでしょうか。しかし、バイオテクノロジーの原点というのは農耕が始まったり牧畜が始まったりしたところに、当然あると思うんです。つまり、生物に対して何らかの操作をして人類の生存、生活、衣食住その他に関して何らかの形の有効な利用法を考えるというのがもともとの目的だとしますと、農耕や牧畜というところへ、当然、帰っていくはずなのです。たまたまそれだけのことで……。病気を治そうという努力をいろいろしてきて――それも人類の生活の上で非常に大事なことですから――医学とはテクノロジーだったんですけれど、あまりに無力で何もできなかったのが、やっと最近になって少しできるようになった。そこで、できる面だけが脚光を浴びているような、そんなことが今、言われているだけなのかもしれません。牧畜って簡単に言いましたけれど、やっぱりそのあとには、生産性の高い牛だとか豚をどうやって作るかという話も農耕、牧畜の一つですし、よりすぐれた品種の果物を栽培するかということも、そのあとの一つの発展ですから……そうしますと特にものすごくショックを受けたりする話題ではないような気も、一方でするんですよ。というより、今まであまりにもあたりまえの形で自分たちのしてきたことが、長い間ゆっくり進んできたものですから、それで自然を支配し、人類の数が増加してきた――他の生物に比べて人類の人口は一番増えていますからね――そういう上で、それまであたりまえだと思い込んできた理念が、今度ようやく、いろんな形で自分たちの生活そのものに直接、影響を及ぼすような形の技術になってきたということでしょうね。そこで改めて反省をしてみようという気になりかけているのが、今の状況ではないかと思います。

沢田――そういう意味では、医学それ自身が、ヒポクラテスのはじめからバイオテクノロジーの一つだと言ってもいいと思われるのですね。そういう意味で我妻先生、医学者としていかがですか。医学はもうバイオテクノロジーだと広義に言えば言えますが、現在、特に問題になっている"バイオテクノロジー"を、どのように受け止めていらっしゃいますか。

我妻――確かに木原先生のおっしゃったように、医学そのものが、テクニックをもって体の病気を治す、というものですから、医学がバイオテクノロジーと言えると思います。ことに細菌学の進歩によって消毒法を手に入れるとか、それから免疫の技術ができて予防注射で伝染病がなくなる、それから抗生物質とかが発見されて感染症がかなりよくなるというように、段階的にその当時のいろんな技術が入ってくると、そのたびにワンステップずつ病気が治るようになってくる。最初は、医学は何もできなかったんですね。病気が自然に治るのを邪魔しないという程度のことだったと思うんです。しかし、テクノロジーが入ってきてからは自然に治るだけではなくて、感染症や伝染病は細菌との生存競争のようなものですね。最近はガン細胞との競争ということになると思います。その後のテクノロジーの進歩のおかげで、私が医学生の頃には考えも及ばなかったようなこともできるようになっています。そういう点で、人間が生きるため、あるいは死なないようにするためには、非常に都合がよくなったということですね。しかし、それが将来はどうなるかという先のことは、ちょっと心配になりますね。

沢田――テクノロジー論としては、前進的にどんどん進歩しているのだから、最初の進歩が始まればあとは同じことで、ただ、それがどこかで人間の問題とかかわってくるということが気になるとお考えですか？

木原――それから人間自身が、医学でもって死ががなくなりましたでしょう。今度は人間が増え過ぎてしまう。

沢田――死がなくなるというより、昔より死ににくくなったというわけですね。

木原――ものすごい勢いで人口が増えていますから、それを食べさせるだけの食糧があるのか、住む場所があるのか等々、人間自身がどうなるのかという考えがありますね。

長野――生物学の立場から言いますと、"バイオテクノロジー"というものが、今どのように受け止められているのかは別として、その言葉が元来どういう意味を持つはずであるかというと、"生物の技術"ですね。では、技術とは何かといえば、これは結局、人間の役に立つように自然に働きかけるということで、働きかけるためには相手の仕組みがわかっていなければならないわけです。よく、故障したテレビをドンドンとたたいたら、はずみで直ったなどと言いますが、あれはいま言う意味での技術じゃないんですね(笑)。本当に直すためには内部の配線回路がわかってなくてはならない。生物の配線回路というのは、要するに生物の機械論的なとらえ方ということで、生物学の系譜というのは、その機械論というのがどんどん深まっていった歴史だと思うんですね。アリストテレスと

いうのは、目的論の元祖みたいに言われてますけれども、彼でさえ、人間の体の運動は操り人形のようなものであって、神経や腱を、筋肉を操る「ひも」と考えたわけです。ですから、アリストテレスでさえ、機械論的な生物の理解の糸口を見つけたと言えると思います。その機械としてどこまで理解できたかに対応して、的確に働きかけができるようになった、ということで生物への技術というものがどんどん進み、だから生物学の進歩の歴史というのは、言葉を広くとればまさしくバイオテクノロジーの進歩そのものであったということになると思いますね。それがこのごろにわかに問題になりだしたのは、一つにはそういう働きかけが分子のレベルで行えるようになったことです。これはとりもなおさず、生物が核酸とかタンパク質とかいう分子のレベルで理解できるようになったからであるというわけです。加えて、言い換えみたいなことなんですが、人間に対しても同じようなことができるようになった。なぜなら、人間も動物も同じような分子で組み立てられているからだということだと思うんですね。今のおふた方のお話にもありましたように、人間が人間自身に対して働きかけるようになったということで、バイオテクノロジーは一般的な「バイオ」でなしに、人間に対するテクノロジー、イコール、ホモテクノロジーになったとたんに、バイオテクノロジーとして非常にいろいろ論じられるようになったんじゃないか。序論としてはそんな気がしています。

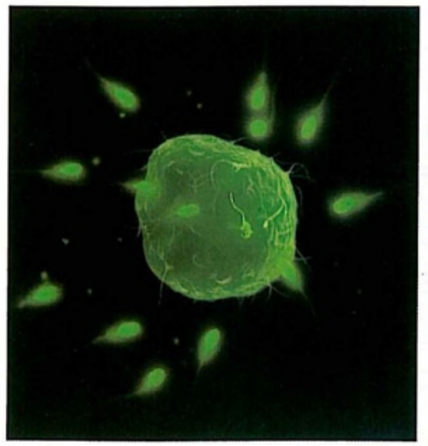
バイオテクノロジーは世紀末的理念か!?

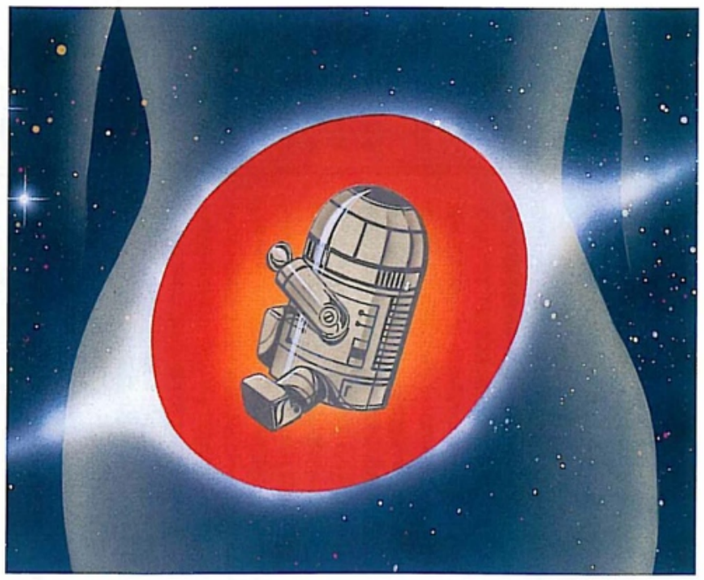
沢田——そうしますと結局バイオテクノロジー、すなわち生命を何も手を加えずに、あるがままに放置しておかないで人間の技術によっていろいろと操作するということは、もうすでに科学的な考え方というかサイエンスというか、そういうものがもう始まっているわけなんです。そうしますとバイオテクノロジーが起こったということは、科学が起こったことと、だいたい同じと考えていい。そういう意味では、その科学の起源をどこまでさかのぼるかというのはいろいろあるでしょうけれど、古代ギリシアにおいても新しい科学的見方と古い神話のモラルとの間の葛藤があったのだから、別に今さら新しいことではない。ただ、今、なぜ新しいこととして騒ぐのかというと、今までにあったモラルの規準では、解決できないような新しい問題が、科学技術の結果起こってきたということで、同じ科学のテクノロジーの現代における新しい展開がそれに前の生き方になじまない所から生じる問題の一つだろうと思うんです。たとえば体外受精とか人工授精とか、これも今までのモラルから言ったら、いろいろな問題がでてきます。あるいは遺伝子工学の面では、今はまだまだできないけれども、将来の可能性として人間の遺伝子を操作して人間を作り変えるというようなことを聞くと、今までの考え方の側からの大きなリアクションがあります。しかし、考えてみると人間以外のところでは、それをやっているわけなんですね。たとえば新しいキュウリを作るとか、牛や馬の新しい品種を作るときには、科学の技術を利用し、自然のままではなく、人間がコントロールして、人間の役に立つような品種をどんどん作っているということがあります。ところが、これが、こと人間となると、大きなモラルの問題としてでてくるというところに、今のバイオテクノロジーの問題があるような気がするのです。言い換えると、人間以外の生物に対して人間を特別あつかいにするという……。

木原——昔は、いろいろなことがかなりゆっくり進んできたということがありますよね。だから十七世紀とか十八世紀というのは、産業革命のときの社会的な大きな変動があったとしても、とにかくそうすぐに自分たちの生活に影響を及ぼすような形では現れなくて、ある程度時間の余裕があったのに、今は情報がすぐに流れるというようなことがあったりします。それから拡大再生産が非常に早いから、いろんな形ですぐにでも起こってきそうな時間的な切迫感というものが感じられます。それに、これも世紀末、十九世紀にも世紀末理念があったように、二十世紀末ということで、そうした世紀末的な、気分的なものがあるんじゃないかというような気がするんです。人間の遺伝子を全部入れ換えて好きなように作るなんてのは、そう簡単にできそうもないと我妻先生はおっしゃると思うんですけどね(笑)。でも、あたかもできそうな言い方をして、それに振り回されるというのは、なにか世紀末的な気分があるのではないかという気がするのです。

沢田——いやまさに、非常にいいところを指摘されたと思います。確かにそういう面が問題にされていることは非常に多い。もっと冷静に考えれば、そんなすぐに結論を出してワーワー言う必要がなく、もっと事態の推移を見守りながら結論を出してもいいところを、ジャーナリズムっていうのはすぐに結論を出したがりますから。何かというとそれにパーッと反論するから、不必要な思想的混乱を引き起こしているという批判を、すればできないことではないと僕は思うんです。しかし、そういうふうに簡単に結論を出してしまうより、それを出すためにはいろいろな問題があると思うんです。その問題を人間にしぼって考えてみましょう。人間が生まれ、そして死ぬっていうことはあたりまえのことですが、生まれるということにもいろいろ問題があって、医師として出産に立ち合われる我妻先生に、問題を人間のことに限定してお話し願いたいのですが、今のバイオテクノロジーは、広く言えばとうの昔から始まっており、牛や馬に対して人間がどんなことをやっても誰も何も思っていない。なのに人間の場合にだけ問題になってくるというのがあると思います。

我妻——私の専門は産婦人科ですが、一つは他の動物とちがって、人間だけが生殖とセックスを完全に分離できるようになったということがありますね。これは昔から、たとえば避妊ができなくとも生まれる前に流産させるという技術はあったようですから、昔から行われてきたことなんでしょう。けれど、今では自然科学の力を借りて生殖と性を完全に分離することができるようになったというのは、動物と人間の大きな違いだと思います。その次に、先ほどおっしゃった人工授精。これは夫婦間でしたら問題ありませんけれども、夫に精子がない場合、他人の男性を提供者として、その精子を使って子供を生ませるとなると、従来の夫婦の間で子供が生まれるということとだいぶ違うわけです。さらに最近の体外受精となると、人間の体の中ではなく、試験管の中で受精させた受精





卵を女性の子宮の中へ入れる。それも夫婦の間でしたら問題は少ないかもしれませんが、受精卵を入れる子宮を第三の女性に借り腹をする。それから先ほどの人工授精と体外受精を組み合わせて提供者の精子を使う、さらにもう少し進みますと卵子を別の女性にもらうか、あるいは夫の精子を別の体の中へ入れて、できた受精卵を洗い流して妻の子宮へ入れる、とかの方法があるわけです。

沢田――借り腹というわけですか(笑)。

我妻――ええ、さまざまな方法が考えられます。さらに今度は、その受精卵を冷凍して長期保存ができるようになると、自分の娘の子宮にそれを入れることも理論的には不可能ではなくなるのです。これによって従来の親子関係、夫婦関係というものとは全く違ったことが起こる可能性があります。もちろん、これも先程おっしゃったようにすぐできるというわけではないのに、今にでもできそうなことを言ってマスコミから騒がれるんですね。確かに親子関係、夫婦関係も今までと違ったものになる可能性はありますから、今から考えておく必要はあるでしょう。これは子供ができるという瞬間から変わってきていると思います。

沢田――たとえば自分の夫以外の精子を受け入れるという問題にしても、慶応大学が一番最初に人工授精をやり始めたわけで、それがもう何千組ですか？ それでも、今まで日本の歴史が始まって以来、夫以外の精子を受け入れて、その子が誠実に育っているという例はたくさんあるわけですね。

木原――(笑) それは社会学の問題で、昔はお妾さん何人も抱えて男の甲斐性だなんて言ってましたからね。

沢田――それが許されるということは、社会的な問題であるのに、医学者がそれを許されないと肩をはられる理由はどこにあるのでしょう？

木原――いや、僕はないと思います。実際、外国では子宮を借りている例がありますからね。だから技術的にできるようになれば、いろんな事情で、たとえばお父さんのほうには遺伝的な欠陥があるから、欠陥のない人の精子が欲しいんだというような理由が、いくつでもつけられるんだと思います。その限界が誰にでも納得できるようなことからちょっとずつずれていくと、いろいろと非難を受けることも起こるかもしれません。そのとき、あとで夫婦だとか親子だとかいう意識がどんなふうに残るか、これは社会学の問題ですね。

我妻――医学の問題よりむしろ、法律的にその子の立場が困らないようにしておかないといけないということがあります。生まれてくる子供の身分や人権を保障することが、一番大切なことだと思いますね。ですから、常に法律的、社会的な問題を考慮に入れながら新しい方法を応用しませんと、医者だけが暴走してしまう恐れがあり、その結果として重大な問題が起こることもあると思うんです。

「モラル」の変化を模索する時間

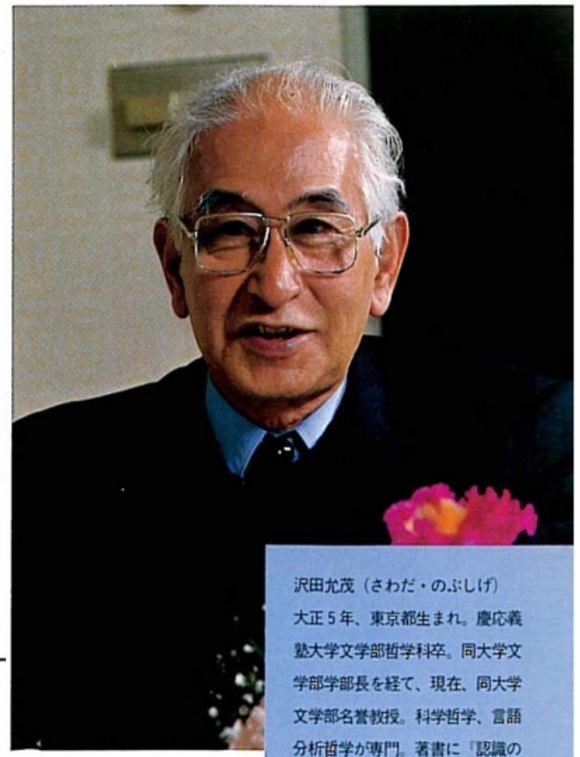
長野――生物学者の立場から、私はこのごろ、意識して生物と人間との違いはないだという発言をするんですけどね。人工授精に限ってみると、たとえば人工授精というのは、いわば商業ベースでして。私、二十年くらい前に、ある、当時の「田舎」大学にいましたとき、たまたま精子を使って研究している人がいました。田舎ですから山のふもとには牧場みたいなのもあって、人工授精屋という人がいるんですね(笑)。豚というのは、精子が一度に何十ccってジャブジャブ出るんです。それを魔法瓶に詰めて飛び回っている。その人に電話一本かけると、いくらでも持ってくる。非常に気軽な商売なんです。では人間の場合にはなぜそんなに深刻になるのだろうか、これはいま出す話題なのか、あるいは今日の結論で出てくるのかわかりませんけども……。

沢田――いや、それは今日の一番の大きな主題だと思います。

長野――だから、少し極端な言い方をすれば、モラルといいますか、絶対的な人間の尊厳とかいうものはおそらくないのであって、社会の中で生物の一種である人間というものが、取り決めとして作ってきたものであるという感じがするんですね。社会で大多数が合意すれば人間と動物がどう違う、どういうことをやってはいかんということは、いくらでも動いていくのであって、非常に長いタイムスパンをとってみれば、禁断の世界だったものがジワジワ、ジワジワとごく普通のカスタムといいますか、習慣になっていくということも別に不思議ではありません。たとえば人工授精そのものが、最初は非常に批難攻撃の的だったと思うんですね。それが夫の精子であっても。だけど今は夫婦間であれば、あまり問題だと考える人は少ないと思います。ことに宗教的なこだわりの少ない日本人なんかでは。長いタイムスパンであったら、人間というのは生物種としては変わらなくても、社会的慣行としては変わったっていいんだといえます。ただ問題は変わり方のスピードということです。人間の一生の長さは、以前の相場ではほぼ五十年なり、寿命が長くなったといっても、せいぜい昔の二倍の百年です。そのくらいしか変わりません。ところが、物事の変わり方、科学の進歩が十倍速くなったとすれば、対応にいとまがないということになります。モラルというような基本的な人工のものさしは、そういうスピードで変化したら非常に混乱するのではないか。だが人間の一生より長いようなジワジワとした変わり方は、許されるというか、摩擦が感じられない。ところが、科学の進歩がたいへん急なものですから、モラルもそれにつられて急激に変わるんじゃないかという恐怖感があるから、逆に絶対変えてはいけないという議論が出てくるんです。そこを頭を冷やして考えてみたら、うんとうんとジワジワとしたスピードなら、変わってもいいのではないか、むしろ変わるのが防げないという考え方もありうるのでしょうね。

木原――ギリシア時代とローマ時代と中世とで、人間の命についての考え方も変わったはずですしね。それに政策によって、奴隷というのは、いわゆる市民権としての人権というものは認められていないわけで、特殊な生物という取り扱い方をしていた時代があったわけですよね。ですから、いま僕たちが、日本国の憲法のもとに(笑)、みんな平等だとか、宗教の自由だとか何とかの自由だとか、必ず平等であるというような形で、いま見ているのと全然違う形の言い方をしている社会があったし、これからもあるのかもしれない。そうなると結婚だとか、あるいは脳死だとか、その死にぎわの問題にしても今後変わったってかまわない。人類はそういう実験を今までかなりの回数を繰り返してきているのでしょう。そして、自分の自由意思で決めたり、決定できるときには、どのような形のものが自分たちにとって最も望ましいのかということを、じっくりと模索していくという時間がちょっと欲しいという感じはしますけれどもね。

沢田――これは現実問題としてそうだろうと思うんです。だけど原理問題として、時間とかかわりなく、新しいものを変えちゃあいけないんだと思う人もあるわけなんですよね。そこに問題があると思うんですけれど……。私は、やはり人間は古いモラル――倫理（エシックス）というのは習慣というギリシア語でのエートス、モラルは同じく風習というラテン語のモスからきているわけですから――人間のモラル＝道徳は、習慣になった行為という意味がありますね。そういう面から見ると、新しいものには必ず反抗というか、抵抗があります。でも長い歴史から見ると、人間というのは最初は新しいものに抵抗するけれども、その抵抗をだんだんとなくして新しいものを受け入れ、習慣としてうまく適応して生きのびていくという知恵を持っていたと思います。そういうことは洋の東西を問わず、どこでも、また歴史の移り変わりのどの時代にも、いたるところにあるわけですね。現代でも今までの古いモラルに対して、習慣に対して、新しい技術が起こってきました。それに対して、どういうふうに適応するか最初はわからないから、それに対して反動があるのは当然なわけです。だけど、そういう形で問題をとらえようとするならば、みんなが賛成するというのを待つということになるわけですね。ところが、僕はそこに問題があると思います。今の脳死の問題にしても行政的なほうから決断して流すという、それに対して反抗があるわけです。モラルの問題とは別に、上からの情報に適合していくか、あるいは下のほうの情報を十分に一致させておいてやるかという選択です。これは脳死の問題とは直接関係のないことだと思います。たとえば弁護士会などが脳死の問題に対して、もっと多くの人々の賛同を確かめてから決定すべきだという言い方をしているけれど、問題は、いったい誰が、どういう形で、すべての人の考え方を総合して結論を出すかということにふれていない。誰もが責任回避しているということだと思うんです。だからこういう問題に対すると、現在ではみんな尻ごみしてしまっているという気がするわけです。

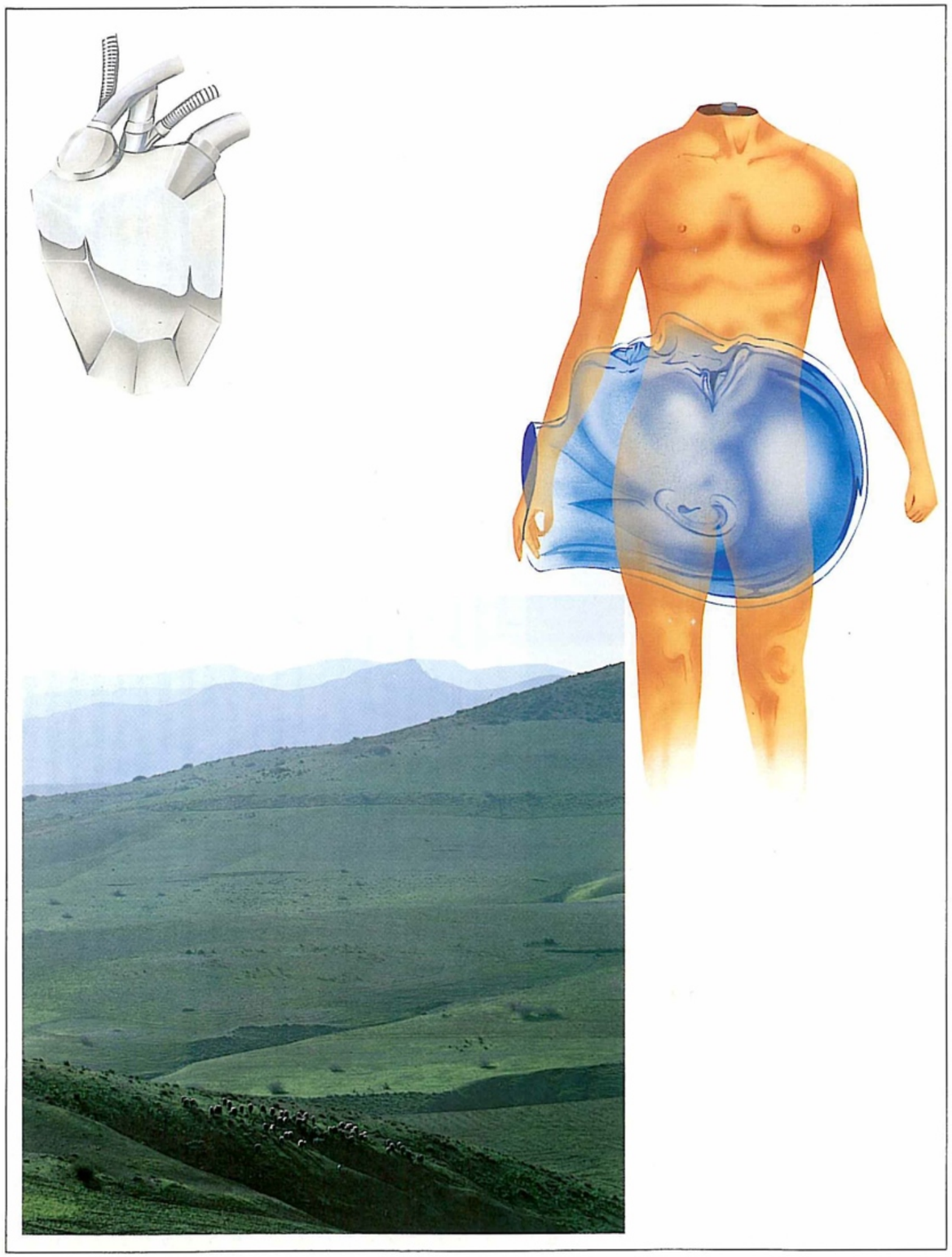


沢田允茂（さわだ・のぶしげ）
大正５年、東京都生まれ。慶応義塾大学文学部哲学科卒。同大学文学部学部長を経て、現在、同大学文学部名誉教授。科学哲学、言語分析哲学が専門。著書に『認識の風景』（岩波書店）、『ライフ・サイエンスの哲学』（講談社）、他。

医師の立場、患者の立場

木原――我妻先生にお聞きしたいんですが、先生は言うなれば第一線の現場にいらっしゃるわけですね。状況によれば体外受精をやろうと思えば不可能ではない、やはり細胞培養しようとする技術だとかは必要ですけどね。その場合、大勢の医師にとっては、患者からの要請があったのだからということが、一つの至上命令のような形であるわけです。つまり、こういう形でかかわっている人が、自分たちはある技術を提供することができる、患者の精神的苦痛だとか何だとかを解決することができるんだという形でやりますと、その患者のほうは全人類のモラルだとか何だとか考えないですよね。(笑)。自分たちの家庭においてはどうだとか。そんなとき医師は、その患者がある依頼を持ってきたときに、拒否する権利がほとんどない。あるいは逆に患者のほうもです。医師から、これはこういう処置のほうが適応性があるんだとか、場合によっては、医師の裁量権の中で医師の好きなような形に行動をとってしまうことだって起こりうるわけです（笑）。

我妻――今のお話には二つの問題があると思うのです。患者の決定権や医師の裁量権はちょっと混きましてね。患者の希望をかなえることが最も優先されるべきだという考え方があるんですけれども、その考えで一部の学者の反対を押し切って、さっきのＡＩＤ（非配偶者間の人工授精）が行われてきたわけでしょう。また、日本では人工妊娠中絶も同じような形で行われている。体外受精などもそうですよね。そこでこの考えを押し進めていくと、女の子ばかり生まれて、どうしても男の子が欲しいからといって、男女の生み分けができるところまで――畜産ですとオスとメスというのは商業ベースで判断できますが――テクノロジーを進めていいのかどうかというところに行くと思うんです。おなかの中にいる子供が男か女かわかりましたら、患者の希望に従って、男だったら中絶して、女だったら生ませるということが、いいとは思わないでしょうが、受精の段階で男女を希望どおりにする方法なら賛成は多いでしょう。し



かし、果たしてそこまで進んでもいいのか、このへんで反省しなくてもいいのかな、という感じが私とすれば常にあるわけです。

長野――先ほど常識が働くとか、それに抵抗があるという話が出ましたが、少なくとも現在という一瞬間を切って、一定不変の基準というのはあるんだなと考えてみると、それすらもすごく弾力的なものだと思います。この場にふさわしい話じゃないかもしれませんけど、たとえば出産のときね、死産であるとか非常に重大な障害児であるとか、そのとき医師の立場と患者の立場は必ずしも一致しないと思います。手当てのしかたで非常な障害を持ったまま生きのびるか、あるいは見かけ上、死産に終わるかというような場合があったとします。可能な限り延命という抽象的な規準はあるかもしれないけど、実際は個々の具体的な例にあてはめざるを得ないので、そのあてはめ方にはいつも幅があるという気がします。長い時間を取ってみれば、弾力性の幅のなかであまり違和感なしに、だんだん動いていって、常識というのが、昔の時代と比べたらかなり変わっていくと思うんです。

現代における医師の裁量権

沢田――あのね、これは私自身目撃したわけではなく、テレビ、映画や話で知る以外にないんですけれど、徳川時代の医師というのは、ある意味では民衆の生活の問題にまでもかかわり合いながら、地域的な指導者の役割を持っていたと思います。ところが今、医師はそういう役割から、科学と技術の専門家として地域の生活から超越してしまうと同時に、お金をもうけるという結果、地域的生活の指導者的な立場というのをなくしてしまった。

木原――山奥や過疎地などの場合、外科も内科もなにもかも全部やらねばならないような場所は、やはり小学校の先生と神主さんとお医者さんというのは、地方のオピニオン・リーダーと一体なんじゃないんですか。

沢田――医師のそういう信頼されるリーダーとしての発言というのが、相当大きな問題提示とかその解決への刺激を与えていいんじゃないんでしょうか。ただ現実には、逆の意味でいまでは民衆が医師を信頼していないということがあります。これは医師が少しもうけすぎだからでしょうか？（笑）実際はどうか知らないけれど新聞にも書かれますしね。民衆は、お金をもうける人には常に疑いを持ちます。逆にお金がなくて一生懸命に治療をしていれば民衆はついていきます。その民衆の心理を医師は理解しないのか、あるいは結果的にそうなったのかは知らないけれど、民衆の信頼を受けようとしたって、これだけもうけちゃったというのでは民衆は誰もついてこない。そういうところにやはり問題があるのではないかと思います。

我妻――新聞や雑誌は、医師の悪口を書くと売れるんだそうですね（笑）。

沢田――そうですね。そういう例があるところに問題があるんですね。だから、やはり医師というのは、人々の生活のなかに入っていって、ちゃんとやれば民衆の人々の生き方を決定するという権威を持ってもいいんじゃないかと思うんです。

我妻――今は、あまりできないですね。こういう考え方がある一方では、患者の決定権というものがあります。医師は今までは俺にまかせておけば大丈夫だという態度でモラルを作ったり、治療法を決めていたものが、最近は、患者さんにこういう治療法とこういう治療法があって、こうすればあなたはあと何年生きる、こっちの場合だとこうです、ということを全部説明して、患者に決めなさいと言わなければいけないという考えが主張されるようになってきました。

沢田――でも、あなたが決めなさいと言って決めてしまったら、それでもう文句は言えないわけです。そこまで徹底してできればいいんだけれど…。

我妻――日本ではまだなかなかできないでしょうね。

木原――そうね。

「モラル」を冷静に見つめる目

沢田――モラルが流動的なのはいいんですけれど、その中に入っている人間、つまりわれわれにとっては非常に困るんですね。

我妻――決めていただかなければ当事者が困ることが、ずいぶんあるわけです。

沢田――実は、この問題はバイオエシックスの中心的な問題なのですが、発言をするとき医学者たちが、科学の立場からいろいろな事実やテクニカルな問題の発達について述べるわけです。ところが、モラルについては誰も客観的に問題にしないのです。あたかもモラルというのは、何か知らないけれど、モラルという言葉で今までに言われてきたものが永久にそこにあると思うだけで、それがどうしてそのようになってきたかを知ろうとはしないのです。科学者は、ある問題が与えられたら、それが何であるかを徹底的に分析します。ところが、現在ある道徳があるといっても、科学者はそれを分析もしないでそのまま受け取ってしまうのです。モラルっていうけど、今みたいな問題のときに言われているモラルというものが何かということを、もっと分析する必要があると思います。いろんなところで科学者が、科学技術がぶつかるモラルとは何か、ともう少し冷静な目で見つめる必要がある。ある意味ではモラルなんて、そんなものは言葉だけであって、正体はないんだと言いたいのです（笑）。

長野――ちょっとそれについて言いますと、さきほどの医者と神主と学校の先生という話に戻って、医者は今はそれほど権威者でないんだというお話が出ましたが、まさにそのとおりだと思うんですね。私のところの大学の主旨というのは、そういう地域の医師を育成するところだったんですけれど、地方に帰って、モラルのオピニオン・リーダーになるという医師のイメージは浮かんでこないんですね。これは物理的に道路網が発達したということで、一般のしっかりしたお医者さんは必要なんだけど、そのしっかりとしたという意味は、自分でこなせるものはこなす、これは自分の手にあまると判断したら、すぐ自動車に乗せて地方の中心の大病院に送り込むといった的確な判断が下せるという意味でしっかりした、見分ける目があるという医師になってくるわけです。クローズド・システムであったら、そこで何かをした場合に、リアクションというのは必ず内にはね返ってくるので、共同体に被害が出るようなことをすれば文句を言われますから。そんなところに、モラルという基礎があったのではないでしょうか。ところ

が、科学というのは、そのような地域性を排除して宇宙一般の真理を追求しますから、地域的なセコセコしたモラルというものはないんだという立場に立たざるを得ないのです。一方、非常に常識的な生活人間として言えば、手近なところでいいか悪いかが確かめられるようなモラルの基準があったほうが、暮らしいいですね。ところが、今日の日本みたいに面積が狭いうえに、人口密度が高く、情報網が発達して全部一体化してしまった社会では、そんな基準は成り立ちにくいわけです。世界的に言えることだけど、日本ではいっそうみんなが手探り状態になるのではないかという感じがしますけどね。

集団としての「習慣」の消失

沢田——一体モラルとは何なのでしょうか。先ほど申しましたように、モラルという言葉はラテン語ですが、倫理のエシックスという言葉はギリシア語で両方とも同じ「習慣」ということ、即ち習慣になった考え方や行為という意味です。確かにかつては、ある一つの集団には独特の定まった習慣が確立していました。しかし、現代のような社会になると、一つの集団だけに確立した習慣があるのかと考えてみると疑問です。日本をみても、戦後はアメリカやその他の国々の影響が入り込み、昔の習慣というものが崩れています。しかし、交通上の習慣というのは法律で定めて規制すれば、みんなそれに従うでしょう。ここでは法律から規制された習慣が現れます。夫婦間の場合はどうかといいますと、法律で規定しても、それは非常に漠然とした一般的形式だけであって、実際には法律で規定できない習慣が強く生きています。その習慣は昔だったならば一つ町、一つ地方は同じ習慣に従ったでしょう。でも今は全部が都市化してしまいました。すべての集団はいろんな違った集団の情報が入ってくると、習慣というものはみんなバラバラになってしまう。ということは、一つの集団の中における一定の習慣、すなわちモラルというのも消えてしまっているのではないでしょうか。たとえば人間の夫婦間のモラル、たとえば、夫以外の人の精子を受け入れるかどうかについても、昔はすべての日本人が一つの同じモラルに従って考え行動したけれども、今ではそういう考えは消えてしまって各自が自分でよいと決断したことに従うと、モラルは一体どこにあるのかという問題になってきます。もしそうだとすれば、実はかつてのモラルは消えてなくなってしまっているのに、多くの人は未だにモラルのユウレイがあると思って、問題にしているということにもなります。

木原——でも、ある患者さんが、自分たちの家系には遺伝的な欠陥があるんだが科学技術で治して欲しいと言った場合、治るか治らないかという話になったときには判断しなくてはならないでしょう。

沢田——それはモラルの問題ではなく、知的な計算の問題でしょう。

木原——昔だったら、できないからあきらめてください、あるいはあと二三週間の寿命という感じで終わったのが、今だったら人工心肺で体温だけは半年でも一年でも、お金さえあれば維持することはできます。意識が全然なくなるということもあるわけですから、そういうときにどうするか、それまでに判断しておかなくてはいけないわけです。人工心肺だとか技術だとかもね。無尽蔵であれば希望する方にいつでも提供できるでしょうけれど、日本に何十台とか何百台とか限られた数しかないと、医師のほうからこの方はどうしようもない、可能性は全然ないというような判断をしなくちゃならないんですね。その判断の基準を医師へ与えないで、自分たちで勝手に考えなさいというのは、とても残酷なことだと思うのです。

現代日本の判断基準

我妻——臓器移植や人工臓器の技術が進歩すると、大きな問題が生じます。今や、アメリカで試用されている人工心臓がもし成功しますと、将来はものすごく高いものになりますから、それの奪い合いか、あるいは金のない人は使えないだろうというようなことですね。大昔、舟が沈みかけたとき、三人のうち誰かが助かるという論理と同じでしてね(笑)。

木原——その次元と同じ論理で今、いいかということなんですね。

我妻——今は、どちらを助けるかという判断に、習慣があるようでないのでしょうね。

沢田——昔だったら奴隷は人間ではないからどうでもいい、今はそうではないというこの問題は、時代時代の人の中の背景で決定する以外にないと思います。永久的な原則をうちたてるべきと言っても、歴史的に見たらたてられないですよ。

木原——それぞれの時代でたてなければいけないのですが、現実にこのような問題に直面したら、こういうふうにしたほうがいいですよ、という指針は誰がたてるんですか? 東大では倫理委員会を作りましたが、あのような形でたてるのも一つの手でしょう。それにカトリックの神父さんとか、そういう人が宣言するのも一つの方法かもしれませんね。ただし、日本ではどれほど有効かは知りませんけどね。でも誰かがある程度の指針をたてたりしないことには、一方の状況ではこうしてもらいたいけど、他方では拒否されるといったことが起こるわけです。だから患者が選択するとき全部の情報があればいいのですが……。交通事故で運び込まれた救急病院ではこういう方針だったが、別な病院は別の方針だったと、これでは困ります。医師のほうでは技術を利用してできるだけ平等にということがありながら、一方で偶然そういうことになっただけで、その人の生命がプラスになったりマイナスになったりすることが現実に起こっているはずですし、これから先も起こりうるわけです。

沢田——かつて日本ではそういうことがあっても、最後にはきちんと判断の基準があったわけです。それを今の人は文句を言います。しかし同じことが、そういうことに反対している人が持ち上げている国には例えばソビエトや中国はちゃんとあるわけです。彼らは基準がなかったら何もできないのです。そういう意味ではソビエトや中国というのは、日本の戦時中の状況と似ているわけです。

木原——皮肉な言い方ですけど、物事の判断がしやすく気楽に暮らせるわけですね。絶対的な基準が見かけ上ありますから。

沢田——全体的にどのような判断をすべきかということになったら、それ以外にないわけです。日本は戦後これを否定してきたわけですね。でも僕はいつも矛盾を感じるわけだけど、日本では、そういう全体から規制に対して反対する方たちの根拠というのが、しばしばマルキシズムの立場だったりするわけだけど、そのようなイデオロギーを持っている人たちの典型的な表れはソビエトや中国なわけで、そこでは全体の国家の立場からピシッと定められているわけです。それは一つのイデオロギーでしょう。だけど、それを守るために犠牲になるというのはやむを得ない。それなしには人間の社会というものが成り立つのかどうかということまでを改めて考えなくてはならないと思います。

木原——個人と社会とどちらにプラスになるのかわかりませんけどね、バイオテクノロジーの技術が、さまざまな形でこれからも出てくるでしょうけれど、それをどのように利用するかという基準を、誰かが決めなくてはいけません。結局は、利用する技術を作っている僕たちや直面している人が作っていくんですけれども、それをどういう形で分配するかというのは、政策の問題であったり、社会理念の問題であったりするのです。

沢田——具体的に言えば、人工授精をどうするとか、脳死をどうするというときには、人々の意見を聞いて決めるというわけです。だけど、人々なかの誰がその姿勢を決めるのか、ある決定をしたら、反対の人でもそれに従わなくてはならないのか、という問題もあります。

木原——いやそんなことはないでしょう。

沢田——でも、みんな従ってくれないと、政策としての意味を持たないわけですから。

木原——法という形なら別ですけどね。

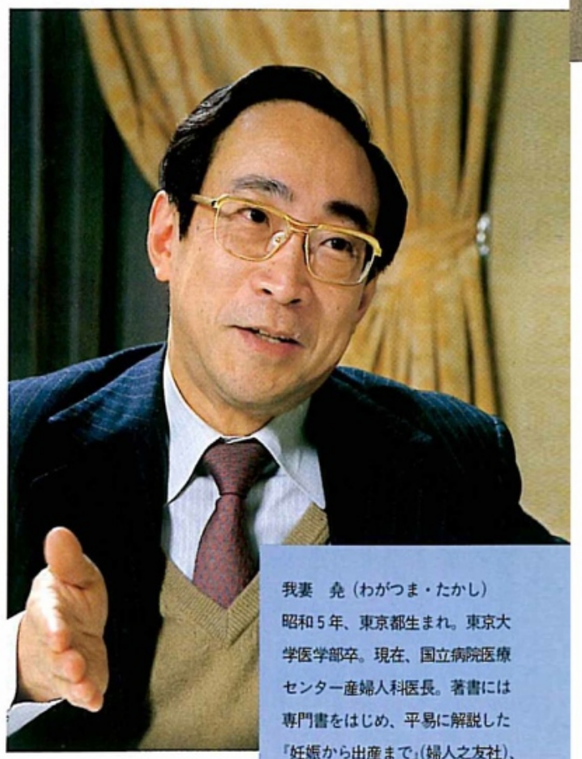
長野——バイオテクノロジーの問題からだんだん離れてしまうけれど、根本的な問題ですね。

沢田——バイオテクノロジーを問題にしていれば、最後はそこへ、即ち法と習慣またはモラルという問題へいくんだと思います。

バイオテクノロジーの受け皿

長野——哲学的な言い方をすれば、ラッセルなどが取り上げた論理的な矛盾みたいなことになります。ある話し合いの席があったとします。そこには誰もが参加できなければ公平ではないのですが、こういう話し合いは頭から反対であると主張している人も呼ぶかどうかという問題ができてきます(笑)。これは考え方によっては決着のつかない、どうどう巡りになってしまうと思うのですが、社会というのはそういう人も含めて多くの人間で成り立っています。その中でどういう合意に達する

木原弘二（きはら・ひろじ）
昭和4年、京都府生まれ。大阪大学理学部卒。慶応義塾大学医学部教授。専門は細胞生理学。主な著書に『生命とはナニか』（講談社ブルーバックス）、『生命のしくみ』（放送大学振興会、放送大学のテキスト）、他。



我妻　堯（わがつま・たかし）
昭和5年、東京都生まれ。東京大学医学部卒。現在、国立病院医療センター産婦人科医長。著書には専門書をはじめ、平易に解説した『妊娠から出産まで』（婦人之友社）、『失敗しない避妊』（集英社）等も多数ある。

か、ともかく一応安定した、あるいは準安定した合意というものがなかったらどうにもならない。バイオテクノロジーの技術の成果をつぎ込む受け皿というのが穴だらけのザルであっては、危なっかしくてしようがありませんけれども、受け皿といってもいろいろな人がいるから、いろんな矛盾というものを抱えこんでいるわけです。

木原――でも、ある病院が人工授精をしない、またあるところは体外受精はしないという方針を打ち出す、カトリックの医師は、理念のなかで人工妊娠中絶を絶対に行わないという、それぞれの医師が各自の理念を表明するのはいいし、それでそれに従って活動なさるのもいいと思いますし、それは自由だと思います。しかし、誰もがそれに拘束される必要はないのかもしれない。

我妻――具体的には、筑波大学で臓器移植をやった医師を告発しているわけですね。ああいう形で批判されるということは、誠意をつくした医師としては非常に不本意だという気がするのです。たとえば、研究費を出す段階で、アメリカのNIH(国立衛生研究所)のような機関があって、そこでOKを出せば研究をしてもいいという基準があればいいのです。アメリカの人工心臓はNIHが使ってもいいと許可しているわけですから。もちろん、ある医師自身が、非常に人気取りで、大学をやめてプライベートの病院を開業したからといって、金もうけ主義だという批判はあっても、仲間から告発されるようなことはないのです。その点、今の日本のようにバラバラの状態ではなくて、もう少し何かの組織があってもいいと思います。

沢田――そういうことをやっている人には人気取りやさまざまなことがあると思います。でも、そのことと本質とは別にしなければならないはずです。そういう意味では、他人を救えるということは非常に大きなことだと思うのです。

木原――あらゆる技術を駆使して患者の要望に対してどのようなことでも応じましょうという団体が一方にあり、他方では世界的なレベルで見て、アフリカなどでは毎日何万人と死んでいるのだから、高級な技術を使って、高級な治療をするのは反対だという団体があります。これらは、それまで育ってきた形の中で、その人が受けついでいるモラルに忠実に生きようということです。だから、このようないくつかの団体が並存しており、患者には選択の自由があるわけです。

長野――過渡的ではあってもです。全体的に平均すると混沌としているような気がします。バイオテクノロジーの基準というのも複数性があって、メニューの選択があるわけです。うちでは脳死は認めません、隣の病院は認めているようですからどうぞ、うちはラーメンだけです、フランス料理はお隣のレストランへ、みたいですけれど(笑)。でも極端に言えば、意見が一致しないで混乱するよりは、うちはこうです、うちはこうですという看板をかかげて、家族を含めて患者が好きなほうに入院してそのように扱ってもらい、お互い文句は言わないことのほうもいいのではないか。そういう状態の中で、両方の立場の人が冷静に話し合って、最終的に合意に達することができるなら一番いいはずです。このことを時間をかけてすればいいと思いますね。

木原――ただ冷静に判断するような形の、人間的な基盤が問題といえます。日本の生活に対する教育、道徳教育などの中にはたぶんあるに違いないんだけど、それが今の教育の中に、自分の生命や人の生命をどのように評価するかという判断できるようなものがあり、それで自分なりにどうするんだということができるような形になっているかが問題です。

沢田――無意識のうちになっていると思いますよ。

我妻――わからないですね(笑)。いろんな考え方があって、それを選択する自由を与えるのはいいと思うんですよ。日本、ことにマスコミなんかは白か黒かどちらかじゃないとだめでしょう。

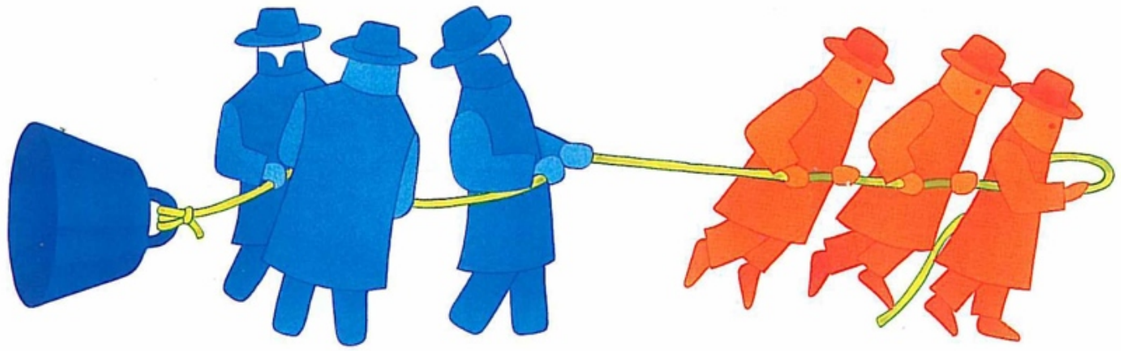
木原――白と黄色と灰色とか、紫色とかがあり、あとは黒がちょっとだけあったほうがいいんですよね。コンセンサスが得られたら、いろんな法制化によって決まるということがあります。法律だとか、実際の法廷の話で、民法の場合には白か黒かを決めなくてはならないから、なんとか承認できるような判定をして慰謝料の額などでいかにごまかすかということなのであって、実際に何が正しいかということを判定しているのではないのです。法律で処理するというのが意味がないのは、現在の公序良俗に照らし合わせて、たぶんこのほうがいいであろうというようなことをしているからなのです。公序良俗は動くんですね。何百年もたつと……。

沢田――法律ではなくて昔の姥捨山のようにひとりで自然に習慣に従ってですよ、法的にはあれこれ言ったとしてもです。人間の自然即ち習慣やモラルというようなものが最後には出てくると思います。

木原――一方、生物というのは非常に保守的な存在だと思うのです。人間とチンパンジーのかけ合わせはできるかもしれません。ただ、人類が百数十万年前からこのような形で生存してきて、馬とロバとかライオンとトラとかのかけ合わせぐらいはできましたけど、思いのままの形のかけ合わせはできなかったでしょう。現実には遺伝子工学のなかでいろいろな違った形ではできかけていますけどね。でも、生物種がいろんなふうに混乱して、途中の中間系の種がたくさんできたということはかつて起こっていないし、これからも起こらないでしょう。基本的には保守的存在なのです。ここで、人間が自然であるという形に含まれている保守的な人間性というのは、本当は何なのでしょうか、それを維持するためには、体外受精をもっと改良すべきなのでしょうか、脳死は承認すべきなのかということを、改めて考えなくてはならないんじゃないかと思うのです。

生物は利己的に行動する

長野――流行の社会生物学は皮肉っぽい考え方で、いやらしいという人も多いんですが、それでいえば、すべての生物は利己的に行動するということですね。働きバチがいるとします。見せかけ上はせっせと巣の世話をして利他的であるようだけれども、実は自分の抱えている遺伝子を確実に子孫に伝えるということからいうと、巣の繁栄が一番その確率を高くするので、実は利己的になることをやっているにすぎないというハミルトンの理論があるわけです。人間もやはり生物の一種だとすると、基本的には利己的であって、ただそれが今の働きバチの例のようにうまく組み合わさって社



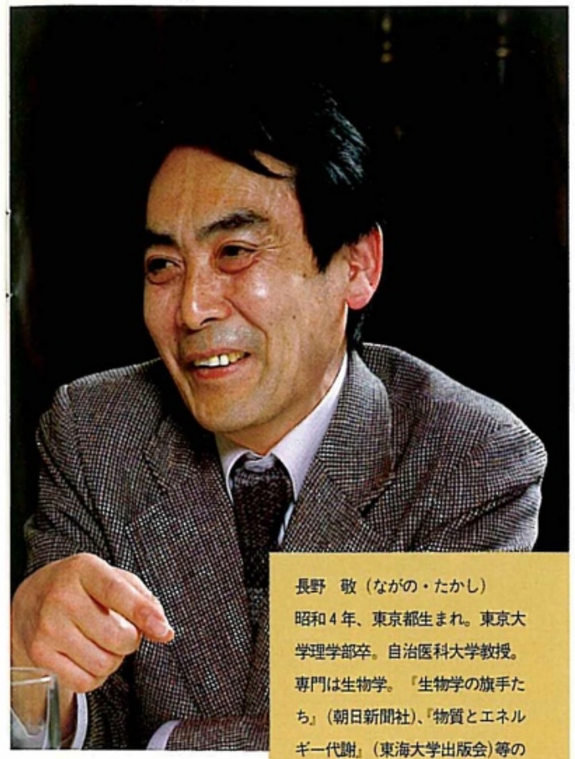
会を形成しているのかもしれない。しかし、それがあまりむき出しになると、社会は続くにしても万人の万人に対する闘いという結果として、気息えんえんとして社会が続いていくだけ、というものになるので、お互いの規則として、まあここで手をうとうじゃないか、という形で社会というものが成り立っているとも考えられています。沢田先生はそうでなく、一番根底には真の利他性というか公共性が何かの背後にあるんじゃないかということなのでしょうか。

沢田――生物の基本的なものから言うと、利他的というのは利他といいながら、自分のどこかに利益があるという利己へ帰着すると思うんです。E・O・ウィルソが言っているように身内優先主義になってしまうわけです。即ち身内の人々に対しては利他的、犠牲的で、それ以外の人々に対しては利己的になる。でも、身内優先主義と人類というのは、微妙に違ってくるのですが、全人類のためにということは人類の身内優先主義と一致するこという ふうに説明もできます。

木原――哲学の立場で論理づけ、根拠づけようとするとそうなると思います。ただ、普通の人間の集団、百人か二百人くらいの村落であったり、一千万人という東京都であったりしても、やはり税金は安いほうがいい（笑）とかね、自分たちの生活を自分たちで保護するためには警察はなくては困る、消防署もなくては困る、救急車も走ってくれなくては困る、しかし、よその地方税が高くっても自分たちは自分たちで……。ということは、小さな身内の中でしか見ていないのです。こういう座談会になりますと、全人類なんてことを言ってますが、でも本当は自分の知っている範囲の中で、自分たちのことしか考えないんじゃないかという気がするのです。

沢田――それでいいと思うんですね。バイオテクノロジーという問題は、現代の新しいテクノロジーが現在の生活に与えたインパクトだと思います。これにどのように対応するかということが、これから先の問題ではないかという気がするのです。

長野――いろんな立場があって、結果として一つのバランスというか、調和がとれるようになるという話がありましたが、そのとおりだと思います。その場合に、個人個人の立場というのではなくて、ある集団同士のバランスというものを考えていくのが、現実的に大事じゃないかという気がこのごろしています。初めに言いましたように、人間と



長野　敬（ながの・たかし）
昭和4年、東京都生まれ。東京大学理学部卒。自治医科大学教授。専門は生物学。『生物学の旗手たち』（朝日新聞社）、『物質とエネルギー代謝』（東海大学出版会）等の著書のほかに、翻訳も『生命』フォン・ベルタランフィ著、他、多数。

直接に関した意味での大きな問題としては脳死があります。つい先ごろ――厚生省に以前から研究班があるんですけれど――脳死の基準というものが決定され発表されました。そうしたところ、弁護士の方の会から、医学的に勝手に決められては困るという談話が出されたようですね。医師会は脳死の基準を決めたのであって、これで日本の法律的な死を決めなさいと言っているわけではないんですね。ところが、弁護士のほうはカッカして、勝手に決められては困ると言っているように読める。いやらしい言い方をしますと、結局どのグループでも個人でも自分の損になるような主張というのは、見かけ上論理的な議論の中でも絶対にやらないんですね。医師としては、やはり生か死かの判断のイニシアチブをとるべきである、特に臓器移植を考えたらそうでなくては困る。弁護士としては、単なる技術的な問題ではなく社会的な基準で、つまり弁護士が口を出せるような場面でもって死を決められなくては困ると言っているにすぎないと思うのです。実際はグループとグループとの利害関係、すなわちグループの利己性です。そのかね合いの中で物事が決定していけばいいんであって、その対立がケンカになることがなく話し合いでいつまでも続くならば、矛盾というのはあってもいいと思うんですがね。

木原――その途中で矛盾の現場に立った人間は、一体そのときに弁護士側の意見で行動をとるべきなのか、それとも脳外科学会の意見で行動をとるべきものなのでしょうか。いつでも、その選択に迷わされるわけでしょ。

長野――今は死の問題ですけれど、体外受精などの生の問題でも同じようなことがあると思います。

"何となく"の理論

我妻――根本的に気になるのは、そういう話し合いがつけばいいんでしょうけど、日本ではつかないおそれがある。というのは"何となく"という意識が非常に大きいんです。ある雑誌で読みましたが、日本で石油タンパクの研究がつぶれたのは結局、「何となくいやだ」という考えが勝ちを占めたからだといわれます。日本では「何となくいやだ」という感情によって、反対する声が大きくなり、世論を動かすところがありますでしょう。理論的な話し合いでなく感情論ですよね。

木原――そして習慣ですよね。

我妻――ですから今度の脳死の問題でも、何となくいやだといわれたらもうどうしようもない（笑）。いくら説明しても結局は、何となくいやだなんです（笑）。

長野――なんだか捨てバチみたいだけど、それですんでいるうちは"何となく"が日本の世論なんでしょう。たとえば心臓移植は和田移植で批難され、ストップしてしまったわけです。ジャーナリズムが極端なことを書きたてたかもしれませんが、それに対して効果的な反論はありませんでした。医師の立場から見れば、民衆がジャーナリズムに扇動されたということかもしれませんが、日本全体がその扇動にのせられたのだったら、のせられる状態というのが、その時の日本の世論なのです。

木原――体外受精の話で意識調査をしようとする話が出かけているわけですが、その"何となく"を探すのが一番難しいのです。意識調査となると、言葉になったり判断をする形のものとなって現れてくるわけで、そうすると、上層な理念の中の世界に応答を求めているわけです。実は"何となく"というのは理念の中の、言葉になって出てこない基盤になっているものです。そういうことを浮き上がらせるような世論調査ができればいいんでしょうけど、おそらく今、バイオテクノロジーに関する意見を聞くと、答えは数字となって現れるけれども、二十年たったら"何となく"というのが最終的に残っていたりするんじゃないかという感じがするんです。だからこそ、その何となくというのをできるだけ正確にとらえたいのです。これは最先端の現場にいる我妻先生や遺伝子工学があやだこうだとあげつらっている僕たちにはできないことです。沢田先生も理念としてはモラルはこういう形では整理がついてないとおっしゃいますが、でも"何となく"という日本の一億数千万かの人間のうちの何千万かの人たちの"何となく"という所を的確に把握するのは簡単でないでしょう。

沢田――最終的には次のようなことを言いたいと思います。モラルとは習慣なのです。ひとりでに習慣になって人間が思い続けるというのがモラルなのです。でも思い続けながら思い続け方が変わってくるというのは、歴史が示しています。

木原――その思い続けているのは、子供のときからたたき込まれているから意識には上ってこないのです。だから、そこをどうやってとらえたらいいのかが問題なのです。

沢田――それは個人の問題でしょう。全体的に変わってくるというのは歴史的にそうなのです。

長野――初めにも言ったけど人間の一生というのは、いくらバイオテクノロジーが進んで、五十年から百年になったとしても、それ以上は伸びないと思うんです。絶対というものはなかなかないんだと言いましたけれど、人生の長さは時間的な一つの絶対であって、物事の変わり方の速さがそれより非常に速いか、ずっと短いかということです。さっきの何となくで言えば、何となく故郷がなつかしいとかは、それはまさに何となくなのです。けれども、マンションに住む人がだんだん増え、純都会型人間の子供が増えちゃって、故郷なんてなんだと言いだしても、日本人が生き続けていけるなら、それは別によくも悪くもない、とにかくそうなのかもしれない。アーサー・クラークの『地球幼年期』みたいにわれわれの子供が全部いっぺんにガラッと変わるのは空想だとしても、もし人間のライフスパンより長いか同程度ぐらいの時間をかけてジワジワと変わっていくんだったら、これが結局人類の進化かどうかわかりませんけど、少なくとも変化はありうるだろうという気がするのです。

沢田――進化というのは価値を含みませんからね。今日のみなさんのお話をうかがっていて、現代のバイオテクノロジー、実ははっきり言ってあまり話題にすべきじゃないのではないか（笑）ということがどこかにあると思うのです。そうじゃありませんか。テクノロジーというのは、いま現実に起こっている事実なわけです。でも、それが意味するものが何であるかということになると、さまざまな意見があり、これだ！というものはありません。でも、現代のテクノロジーによって、いろいろな人間の部分をコントロールすることは、それ自体悪いことではありません。もし悪いということになったら、医学は最初にできてしまったときから悪い、ということになってしまいます。

木原――日本の村落の中で日本人的に育てるという一番大きなテクノロジーは、教育ですね（笑）。ある社会にいま生きている僕たちが、次に生まれてくる子供たちをある枠の中へはめてしまう、それがいつの間にか"何となく"というものの基盤になっていると思います。

人間の、最後の自己主張

長野――今回は遺伝子の組み替えなんかの話題も出るかと思ったんですけど……。あれは企業がもうかるなんていうんで大騒ぎになりましたけれども、少し頭を冷やして考えてみたら、少し値段の張るインシュリンなどのホルモンをバクテリアに作らせるというだけの話です。要するに技術の一つの形態にすぎないと言いますか、バイオテクノロジーの真の問題は、それが人間自身に向けられたときどうするかが、今日テーマであって、あるような、ないような結論になってきた（笑）。

沢田――いつまでも生きのびようとすることが人間にとっての大きな自己主張であるわけです。このことを知ったうえで、これしかできないことをやるのが人間じゃないでしょうか。要するに人間が永久に生きのびようとすることは、逆に言えば、人間の自己主張であり、利己主義でもあります。

我妻――医学というものは、人間を生かすためのものですからね。

沢田――でも、何でもかんでも人間を生かすことが、種としての人間を生かすことになるのかどうかはわからないですね。どんなに科学的に理論的に押し進めていっても、最後には懐疑主義にぶちあたらないですますということはできないと思います。

木原――もともと楽天的でしてね（笑）。何か不安があったり、困るということがあるから、人類はかつていろいろな形で、予測のつかない形でも解決してきた能力を持っていた、人間の知恵ですね。そういうものがある限りは、問題ができても必ず解決できるといいます。本当にできるかどうかはわからないけれど（笑）。

特集
バイオテクノロジー

生命と生活とモラルについて

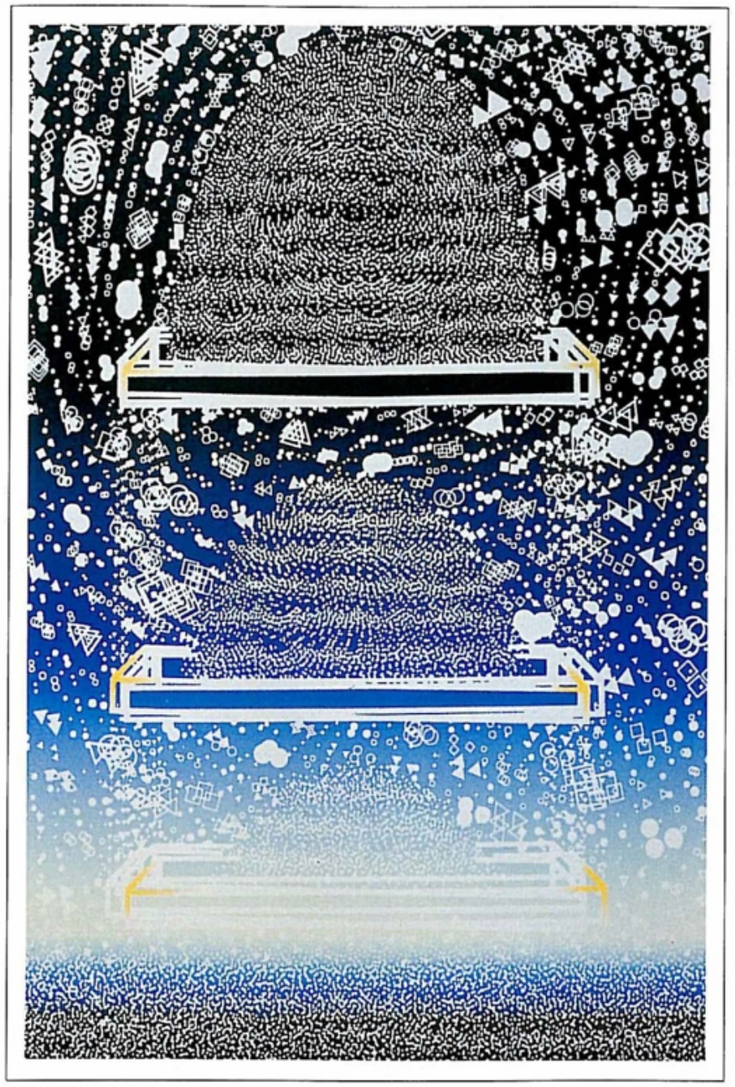
沢田允茂（慶応義塾大学名誉教授）

バイオテクノロジーという概念は、生命を科学的な知識にもとづいていろいろと操作する技術、ということを意味している。その意味ではそれは医療と同時に既に始まっており、現代では家畜や植物の品種改良の技術として、このような領域ではほとんどすべての人々はその技術の使用の状況について何の疑問ももたないのが普通である。それどころか、そういう技術をもっと効果的に使うように科学が進歩することが、人間の生活の幸福につながっているのだ、という無意識の期待をもっている。ところがこの同じ技術の型をつかって、例えば牛の人工授精と同じ型の技術で人間の人工授精をやろうとすると、いろいろな反対の意見が生じてきて、一つの問題となってくる。脳死や臓器移植の場合でも、それが家畜のためになされるときにはだれも問題にしないだろうし、移植可能な牛の臓器を売買するための会社が発達しても、だれもそれを道徳上の問題にしないだろう。それが人間の場合になると問題にしはじめる、というのは何故だろうか。私は現在のバイオテクノロジーが引き起している社会的、道徳的な諸問題を考えていくとき、この問題にたいしてどう答えるかの、答え方の方向を最初に考えておくことが一番必要なことだと思う。何故人間の場合だけに問題にして、他の生物の場合には問題にしないのか、ということが問題の始まりであり、問題の方向を決定するものと考えていいからである。

結論的にいうと、人間は自然の一部であり、自然を、そして他の生物を大切にしなければならない、といった通りのいい考え方にもかかわらず、人間という霊長類の一つの種は、自分の種の存続を一番大切にするという生得的な考え方と行動の仕方をもっていて、人間が生きていくために必要な（例えば食物として利用する）他の生物に対しては、人間同士の生活を規制する道徳をあてはめようとしない、という種の利己主義から逃れることはできないからである。勿論、個人が飼育している愛玩動物への愛情の存在を拒否するつもりはないが、考えてみるとこのような愛情と、人間が生活を共にしている仲間の人間に対して抱いている協同感（必ずしも愛情とは限らない）とは決して同じではないし、後者は前者よりも、もっと基本的な感情だということができる。また思想として自然を愛すべし、とか他の生物を大切にせよ、と主張する人がいても、そのような人が他の生物を食物として喰べるためにその生命を奪うことを一切拒否しているわけではない以上、そのような主張としての自然への愛と、現実の生活のなかでその根底にあって人間を支配している種の利己主義とは別のものであり、前者は否定できても後者を否定することは実際上、不可能である。このような利己主義の遺伝学的な基礎をW・D・ハミルトンという集団遺伝学者は一九六四年頃に「包括適応度」という仮説をたてて、人間以外の動物の社会行動に見られる利他的、自己犠牲的行動を説明しようと試み、この考え方はいわゆる「社会生物学」sociobiology と呼ばれているグループの基礎となっている。そしてこのような動物の社会に見られる利他的行動は、実はそれぞれの動物の種を守るという身寄り中心主義または血縁優先主義（nepotism とよばれる）に他ならないのである。人間はこのような他の動物の利他主義のなかにある血縁優先主義的な考え方を否定して、いわば自分を中心にした血縁の輪をより広く拡大して、全人類にまで、そして全自然にまで広げることが思想としてでき、そのような理念のもとに（場合によっては）行動する、という点が他の動物と異なる点である。この点に人間の文化、思想あるいは言語の働きの大きな影響があるということができる。しかしこの利他主義の輪を小さな血縁集団からより大きな集団、しかも人間という種を超えて他の生物の種にまで広げていくことは、頭のなかで、あるいは思想としては単純に広げることができるけれども、実際の生活のなかでは常にいろいろな制限をうけているし、また拡大しようとする傾向と同じく縮小するか、あるいは拡大することにたいする反対の傾向が人間の常性自身のなかに在るということもいえるだろう。

このことは人間の、いわゆる道徳とか倫理とよばれている考えのなかにも現れている、人間のもつ道徳は人間である以上、すべての人間に伝達され、かつ受け容れられるか、というと決してそうではない。人間の道徳もまた人間の集団の行動を合目的的に効果あるようにするためのきまりであり約束ごとである。そして人間の集団も他の動物の集団と同じように無数の小集団に分かれ、それぞれの集団が住んでいる場所の諸々の条件に適応するような社会的行動のきまり、即ち異なった道徳をもっている、特に人間のばあい、他の動物にはない言語、文化、思想といった新しい形態の知識を用いて環境への適応をより効果的にする手段をもっているが故に、その適応の仕方もより細分化され、多様性を帯びかつ個性化されるという傾向をもってくる。この他の動物には見られない、例えば言語の違い、宗教の違い、物語として伝えられる歴史の違いなどが異なった「生き方」を、そして道徳をつくりだすのである。

このために人間の道徳は、すべての人間に共通な道徳としてよりも、個々の社会集団によって異なる特殊な道徳として出発する。例えば人間の死をどのように取り扱うか、ということについても、歴史の時代を遡れば遡るほどその違いがが判然として厳格に守られている。死者の身体を野ざらしにして鳥の餌とすることが死者のためになるという信仰（一つの物語として信じられている）からくる道徳があるかと思えば、ふたたび魂がその人の身体に立ち戻るというストーリーを信じて、その死者の身体をミイラとして保存するという道徳も



ILLUSTRATION/運見智幸

ある。このようなタイプの道徳からみれば、死者を火葬にするということは許し難い不道徳な仕打ちといわれるであろう。

このような道徳の地域的、歴史的に閉じられた性格は、人間の集団が多くの小集団に分かれて独立していればいるほど強い。そして交通や通信の手段が発達し、また生活の経済的手段がそれに応じて自給自足でなくなるにつれて、他の人間の集団、文化との交流が盛んとなり、その結果、自分の社会集団以外の道徳についての知識が増加し、

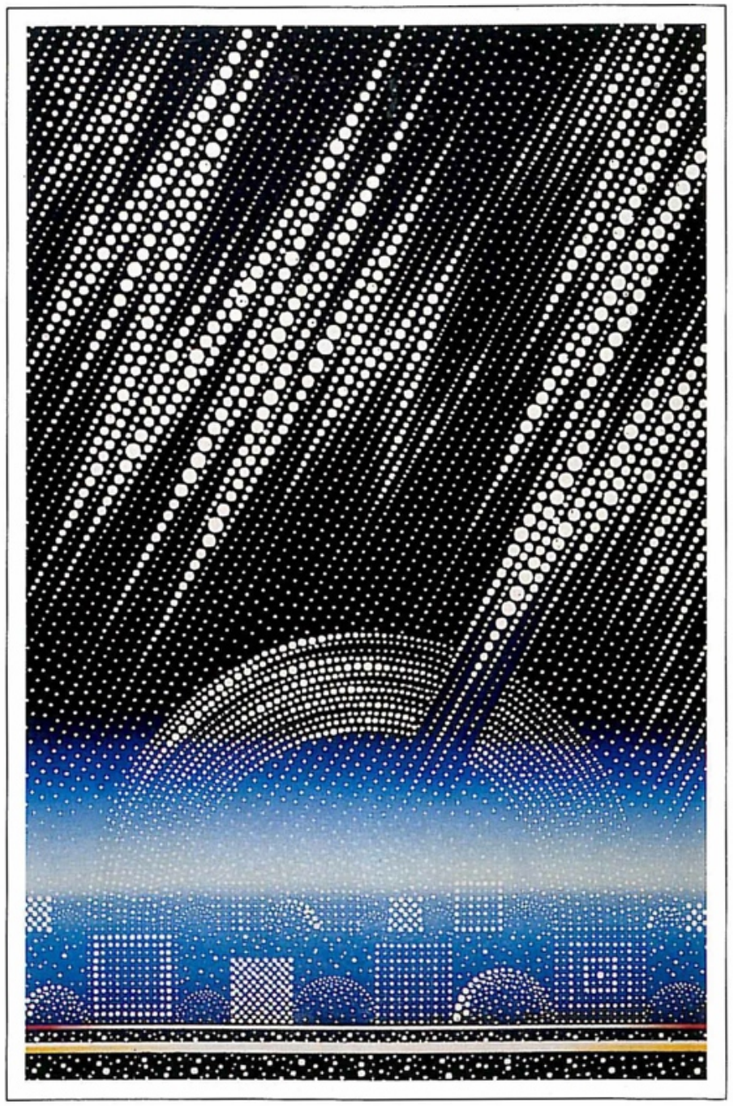
にある。

現代いわれているバイオテクノロジーの発達が引き起こしている道徳的問題を考えるとき、科学技術の進歩には異なった解釈があるのではなくて、一度開発されれば、その科学的、技術的知識は世界中どこでも同じである、それに反して、そのような同一の知識をどう使うか、どう評価するか、ということは人々の道徳的評価の問題であり、この人々の道徳というのが今述べたような、いわば自由化の傾向と状況のなかにある。かつてのように道徳の基礎となる習慣が入りまじり、どの人間の集団へ行ってみても同じような習慣がみられると同時に、他の集団とは違った独自の習慣もみられる、というふうになってくる。こうなると、一つの社会集団に共通な一つの道徳というものが解体して、道徳は人々の職業、年齢、住んでいる場所、他の集団との関係などによって規定されるために、一つの社会集団のなかにもいろいろな異なった道徳に従って考え行動する小集団、場合によっては一人一人の個人にまで分解されてくるという傾向

一つの国、一つの地域が共通の一つの道徳に従って考え行動する、という傾向が解体し始めているのである。そのために、人工授精、体外受精、臓器移植、脳死、尊厳死など、新しい科学技術の結果として可能になったような「生まれ方」や「死に方」にたいして、人々が道徳的にどう反応するかは、極端にいうと個人によってみんな違っているともいえる。勿論いくつかのあるパターンに分類することは可能であるにしても、現在の状況で、例えば日本の国内ですべての人が自然に賛成するような一つの道徳が現存している、などということは考えられない。戦時中には少数の例外を除いては国民の大多数が支持していた「国家を守るために犠牲になるという崇高な行為」という道徳的評価が分裂してしまったように、どういう生まれ方、死に方をよしとするかは人によって異なる、という状況である。

このような道徳的状況のなかで、新しいバイオテクノロジーの結果生じた問題をどのように公的に処理するか、については論理的にいって二つの道しかないと思われる。一つは個人の好きなように選択できるような法律をつくることである。道路を右側通行にするか左側通行にするか、とかその他の生活上の法律は「生活のなかでの行動」に関するものである以上、各自の自由は全体を混乱させることになるから法律として認めるわけにはゆかないだろう。しかし、「どのようにして生まれるか」とか「どのようにして死ぬか」ということは「生活の始まりと終わり」の問題であり、生活のなかの問題ではない。したがって個々人の自由な選択を生かすように法律をつくっても、生活のなかの行為の混乱にはつながらないだろう。精子銀行や臓器の問屋ができるということはいかにも「生活のなか」の問題のように見えるが、それによって生活している人々に実害を与えるということは(他の生活のための法に触れない限り、そしてこのことは法的に防ぐことができるはずである)なく、車に人々が頭のなかで、その所在もわからぬのに恐れている。道徳という過去の亡霊に気がねしているから問題になるように感じられるだけである。

もう一つの選択は、交通道徳と同じように一つの共通の道徳をつくるために、既存の道徳では何故不十分なのか、新しい道徳をどのようにしてつくるか、その効果はどうか、などという道徳上の問題を十分に考え、新しい道徳をつくるに必要な思想的準備を「教育制度」のなかで積極的に取り入れるということである。私はかつてユネスコ主催の「哲学教育・研究」に関する会合に出席したことがあるが、そのときフィリピンの代表から、フィリピンでは小学校のときから「哲学」の授業がカリキュラムのなかに入れられているときいて



感心したことがある。日本でも受験のための、ナポレオンが、何年にどこで死んだ、などという知識を教えるかわりに、人間の生とか死についてのいろいろな問題を、もっと客観的な広い見地から見るような訓練を小学校の頃から始めるべきではないだろうかと思う。戦後、道徳教育は当時の進歩的文化人によって拒否されてきた。たしかにその理由には納得すべき点があった。しかし今や時代はもっと先にすすみ、道徳教育として取り上げねばならない新しい問題が生じてきたのであるから、この新しい歴史状況のなかで、新しい道徳教育を取り上げることに、もっと熱心になるべきであろう。

いずれにしても、現代において「生命の倫理」といった標題で問題とされている、バイオテクノロジーの人間に引き起こした問題を解決するためには、科学者はもとより、一般の人々も、また政策決定の立場にある政治家も、生物学、医学の発展に目を奪われて、道徳とかモラルというものを客観的に分析してその実体をみとどけるという態度が欠除しているように思われる。このことは法律学者にしてもそうである。法的にどう規制するかということと人々のモラルとは切っても切り離せない問題である。そして人々のモラルをどう理解するかについての客観的な議論は、法学者の間にも為されていないようである。これらの人々の見解は、強引に実例をつくり上げて法律化していいではないか、という型か、民衆の同意という道徳的支持を得なければ法制化すべきでない、という型の意見に二分できる。しかしどちらも法と道徳との関係と道徳そのものの実体の洞察を欠いているといっていい。人間の生と死の問題は生活の中の問題ではないとはいえ、既存道徳と深く結びついており、決して交通道徳の法制化と同じではないということ、及び民衆の同意をどういう形でつくり上げていくかの問題を無視して議論されているのである。このような道徳についての問題の洞察と分析を無視してこのバイオテクノロジーと人間とのかかわりの問題を解決することはできないと私は思うし、そのためには道徳というものを、もっと客観的・科学的に分析していくことが必要であると思われる。

FRAGRANCE OF SPIRITS AND TALKS

徳間康快 VS 藤 真利子

YASUYOSHI TOKUMA　MARIKO FUJI

あなたとお話ししていると、何かこう、果敢で積極的な人柄を感じますね。ご自分でも、男性的ともいえるような一種の突進力を持っていると思いませんか？　（徳間）

私は、ドラマチックな役柄が自分に合っていると思います。人生が、あるときガラッと変わってしまったり、いつも断崖に立たされているような役が好きです。　（藤）

徳間康快　大正10年10月25日、神奈川県横須賀市生まれ。早稲田大学卒。読売新聞本社記者を経て、徳間書店、大映、徳間ジャパン、東京タイムズ社など、23社を主宰、経営する。

〝とにかく、面倒見のいい父でした〟

徳間――今日はお忙しいなか、どうもありがとうございます。藤さんはこの『ステア』という雑誌をご存じでしたか？

藤――はい、拝見したことがあります。

徳間――この雑誌は、HBAというホテルのバーテンダー諸君の組織の機関誌なのですが、今回はメンバー諸氏の強い要望があって藤真利子さんとの対談ということになり、私としてもたいへんうれしく思っています。

お父さんの藤原審爾先生とは、私は同年輩ということもあり、また徳間書店からも雑誌や『わが国おんな三割安』『静かな脱獄者』などの単行本も出版させていただいた間柄で、個人的にも親しくお付き合いさせていただきました。昨年末にお亡くなりになり、とても残念に思っていますが、お嬢さんの立場からみたお父さんはどんな方でしたか？

藤――そうですね。作家の父をもってどうですか、とよく聞かれることがありますが、私にとっては唯一の父ですし、べつに作家であろうが、そのことは関係ないんですね。ただ普通の父親だったということだけなんです。

徳間――お父さんは、とても野球がお好きでしたね。

藤――そうです。チームまでもっていて。

徳間――昭和四十四年の長崎国体に東京都の代表として出場したこともあったでしょう。作家個人で野球チームをもっていて、そこまでいったというのは、おそらく先例がないんじゃないですか。

藤――でしょうね、よくは知りませんけれど。やはり、すごい熱の入れようでした。たとえば高校野球などをテレビで見ていて、ドラフトを自分でやってしまうんです(笑)。目ぼしい選手を地方から自分のチームに呼んでしまう。

徳間――スカウトしちゃうんですね(笑)。

藤――ええ、引き抜いて面倒までみてしまう。人の子供の面倒をみるのが好きで(笑)。珍しい父です、そういう意味では。人の面倒見はとにかくよかったですね。

徳間――藤原先生は〝病気のデパート〟と異名をとるくらい、いろいろな病気をされたということですが……。

藤――ええ、病気はほとんどやったような感じですね。

徳間――で、道楽というと野球だったんですね。

藤――それに麻雀。まあ、年を取ってからは陶器、焼物ですね。

徳間――お父さんが危篤ということで、藤原審爾チームの面々が北は北海道、南は九州から駆けつけたと聞いて感激しました。

藤――どうしてご存じなのですか？

徳間――出版関係の人間なら、みな知っていますよ。

藤――そうですか。会えないでお帰りになった方もいらしたんですが、みなさん東京に泊まられて……。父が入院していたのは三井記念病院だったんですが、その病院のかなり大きなロビーが、うちの関係者ばかりになってしまって大変でした。

徳間――それだけ慕われていたんですね。先生は教育問題なども真剣に取り組んでおられましたし、われわれ出版社のほうでも編集者の教育をお願いしたりもしました。

〝そのとき、担当編集者を二十人くらい集めて、車を連ねて、日本じゅうを走り回るということをなされる。そういう趣味がおありになった。要するに「実学」をやらせるんだ、と。辛いスケジュールをみんなでこなすなかで、若い者たちは何かいいものをつかむだろう、それが現実だとおっしゃって。あるときは、参加者が軒並みスピード違反で捕まったことまであるんですよ(笑)。

藤――ええ!?　そんなこともありましたでしょうか(笑)。

徳間――唐津に一泊、長崎に一泊、翌日は鯛釣りをして、中国幹道を通って岡山に行き、岡山に一泊して備前焼を見学したりといった調子でしょ。そんな「藤原旅行団」といったものを作るほど、ひじょうに面倒見のいい方だった。だから、お弟子さんもたくさんいますね。高橋治、垂水悟郎、色川武大さんもそうですね。そういう意味では、社会的にもひじょうに大きな作家活動を良心的に行った方でした。そんな大先生を父上にもたれたということは、やはり真利子さんの今後に大きな意味があるのではないかと思います。

藤――ええ、そうですね。

〝学校時代のお友達、シスター、先生方が心の支えです〟

徳間――ところで、真利子さんは郷ひろみのファンだったということですが。

藤――それはものすごく昔の、デビューした頃の話ですけれど(笑)。

徳間――初恋の相手が郷ひろみ的タイプの男性だったということですか(笑)。どうして彼に惹かれたんですか？

藤――昔、「さらば夏の光よ」という映画がありまして、それがとてもよかったんですよね。それでファンになったんだと思います。歌からではなく、映画をみて惹かれたのだと思います。

徳間――でも、ここにあるインタビュー記事に「郷ひろみは男の中の男か」という質問に対して、あなたは、そんな感じは全然しないって答えているけれど。

藤――昔のことですから(笑)。今は随分、男っぽくなられたんじゃないですか。とても真面目な方ですし。

徳間――ところで、どうですか。「結婚」については。そろそろ適齢期だけれど、男性観というか、どういう人なら人生を任すに足るかという話をお聞きしたいんですが。

藤――漠然と結婚したいと思っていましたが、このあいだ徳間社長にお会いしたとき「女優は結婚するな」とかいわれた言葉が耳に残っておりまして(笑)。それが心にズブッと突き刺さっていまして、今は当分しないでがんばろうかなと思っています。

徳間――いや、私はいわない(笑)。あなたがご自分で、女優は結婚しないほうがいいかと聞かれるから、女優は、美しい女性は、一個人に関わりをもつなといっただけで(笑)。まあ、それは譬いといて、結婚するとしたら、どういうタイプの人がいいですか？

藤――この年になって、タイプとか理想とかいってられません(笑)。とにかく、あまり大きな夢はないんですよ。お友達はみんな非常に早く、それもいいところへお嫁に行ってしまったんですよね。カトリック系の女子校というせいもあるのでしょうけれど、お友達はみんな結婚することを十字架のように背負って生まれてきたような感じがありました。でも、私にはもともとそういう考えがなかったんです。誰かと早く結婚すべきだ、主婦になって子供を産むべきだといった考えが、根っからなかったものですから。まあ最近は、少しは考えますが(笑)。無理やりお見合いしてでも結婚したい気にはなれませんね。成り行きまかせで、できなかったら一生結婚しなくたっていいんです(笑)。

徳間――きっと、全国のファン諸氏も喜ぶことでしょう(笑)。あなたは美智子妃殿下が出られた聖心女子大学の文学部出身でしたね。歴史社会学科人間関係専攻でしたか。

日本女性の憧れのエリート学校ですから、お友達がみなさん良家へ嫁いでいらっしゃるのも当然ですけれど、どうですか、そのお友達や学校のシスター、先生方にもあなたのファンが多いでしょう。

藤――ええ、本当によく応援してくださって感謝しています。在学中にデビューした当時は、学校の名前はけっして出さないとか、芸名を使うといった条件でお許しいただいたりと、学校にもずいぶん迷惑をおかけしてしまったのですが、その後はシスターの方々などがとても応援してくださって。父が他界したおりにも、学校の修道院でお祈りの会を開いてくださったり、お茶会をもうけて励ましてくださったり……。学校時代のお友達、シスター、先生方が本当に心の支えになっています。

〝女優には反対だった父も、デビューが樋口一葉役ということでコロッとだまされて……〟

徳間――そんな素晴らしい方々が応援してくれているわけですから、一層の精進をされて、ぜひ大女優として開花していただきたいのだけれど、芸能界に進むことをお父さんは当時、反対なさったそうですね。

藤――ええ、ものすごく反対されました。私は絵も好きで、高校入試のときに聖心と女子美を受けたんです。もし、聖心に落ちたら女子美へ進んで絵をやっていたと思います。そうなっていたら、女優にはならなかったはずです。でも、たまたま両方受かってしまって、聖心に進むと同時に絵のほうはとりあえずあきらめました。それで演劇部に入り、しばらくして女優になりたいといったら、父は自分の経験から女優はやめてくれっていうんです。文章の世界はおもしろいからどうかとか、建築家になってみたらどうかとか。建築については、まあ、自分のやりたくてできなかったことを押しつけるという感じでもあったのですけれど（笑）。ともかく反対されました。

徳間――デビュー作は昭和五十二年、ATGの「北村透谷　わが冬の歌」。これはどんな役でした？

藤――樋口一葉の役です。それで、樋口一葉ならというんで、父はコロッとだまされちゃったんです（笑）。そのときは私、あがってしまってカチカチでどうしようもなかったですね。

徳間――テレビ初出演も同じ年のTBSテレビ小説「文子とはつ」でしたね。つぎの年はフジテレビのドラマ「飢餓海峡」ですか。娼婦役を熱演され、たいへん評判がよかったと記憶しています。たしかこの作品でゴールデンアロー賞のテレビ部門新人賞を受賞されましたよね。

藤――ええ、それが私の代表作だと思っています。

徳間――それ以後は映画にテレビに、また舞台や歌にも大活躍なさっているわけですが、それだけ数多く出演し、数々の役をこなしてきて、あなたが一番好むのはどんな役柄ですか？

藤――ドラマチックな役柄が自分に合っていると思います。「飢餓海峡」の役もそうでしたけれど、人生が、あるとき突然ガラッと変わってしまったり、いつも断崖に立たされてしまうような役が好きですね。平凡な女性の役って、あまり好きじゃないですし、下手です（笑）。

徳間――今度、出演された野村芳太郎監督の「危険な女たち」（松竹）での役どころもドラマチックなものですか？　アガサ・クリスティ作品の日本初の映画化ということで話題になっていますが……。

藤――絶壁の上に建つ別荘で起こる殺人事件を中心に話が進んでいくのですが、私は歌手であり、寺尾聰さん扮する男性の元愛人で、その別荘で行われたパーティーの席で偶然、再会してしまうんです。そして翌朝、その男性が殺されてしまって、彼をめぐる女性たちを中心に話は展開していきますが、あとはぜひご覧になってください（笑）。

徳間――あなたとお話ししていると、何かこう、果敢で積極的な人柄を感じるのですが、ご自分でも男性的ともいえるような一種の突進力をもっていると思いませんか？

藤――そうですね、友達にもよくエネルギーがあり余っているんじゃないの、っていわれることもあります。

徳間――男性に愛されるというよりは、むしろあなたのほうから男性に恋をするというタイプじゃないですか？

藤――そうかもしれません（笑）。相手が自分をどう思おうと、あまり関係ないっていうようなところは確かにあります。

徳間――つかんだら離さない（笑）。

藤――これぞと思ったら突進しちゃう（笑）。

徳間――そういうあなたにとって、では女優とは何なのか、藤真利子の女優論を聞かせてください。

藤――あまり考えたことはないんですけれど、ただ、いろんな方からいろんなものをどんどん吸収して変わっていかなければならないとは思っています。デビューして何年間かは、演技的に上達することだけを心がけてきました。ところが、途中から、それだけではいけないんじゃないかと思うようになりましたね。たとえば、演技しなくても美しかったり、綺麗だったりすることがものすごく大事なんじゃないかな、と思い始めたんです。毎日、美容院に通ったり、お化粧したりといったことで保たれる、単なる美しさではなく……。これは先輩の女優さんたちを見てててすごいなと思うことですけれど、生まれつきの美しさだけでなく、やはりもっと別の努力に支えられた美しさをもつことが、本当の女優じゃないかと考えるようになりました。

徳間――外的な美しさだけではダメですよね。たとえば整形美人というのは、それほどの美的感覚を人に与えない。結局、心の美をどういうふうに個性的に発揮できるか、ということじゃないかな。あなたはそうした要素をもっていると思う。というのは、藤さんはとても明るくて繊細な精神の持ち主であると同時に、都会的であるだけでなく、非常にドロ臭いものももちあわせている。とても古風なものと、近代的なものを同時にもっている。そういう何か屈折した、光と影とか、昼と夜といった矛盾し合うもの――これは大袈裟にいえば人間の宿命みたいなものなんですが、これが作為的に作られるのではなく、自分の中におのずから具わっていないと個性的な特徴ある演技はできないと私は思うんです。あなたは、そうした演技のできる数少ない女優の一人だと思っているんですけれどね。

藤――そんな（笑）。ただ、そうなりたいという希望はあります。

藤 真利子（女優）

昭和30年6月18日、東京都生まれ。本名・藤原真理（作家・故藤原審爾氏次女）。聖心女子大学卒業。昭和52年、映画「北村透谷　わが冬の歌」（ATG）でデビュー。同年、テレビ番組「文子とはつ」にレギュラー出演。翌年、「飢餓海峡」等の演技により、ゴールデンアローテレビ放送新人賞（最優秀新人賞）、テレビ大賞新人賞、映画テレビプロデューサー協会新人賞（エランドール賞新人賞）等を受賞。以来、映画「幸福号出帆」（昭和55年）をはじめ、映画、テレビ番組で大活躍。また、舞台では、3年前から毎年上演されている「アマデウス」が好評を博す。この間、シンガーソングライターとしても活躍、「微美杏里」のペンネームで多くの歌手の作詞も手がける。近作は、5月末封切の松竹映画「危険な女たち」。

テレビドラマ「昭和ラプソディ」（TBS系）より

映画「危険な女たち」（松竹、野村芳太郎監督）より

ステア対談　FRAGRANCE OF SPIRITS AND TALKS

〝何をすべきかという精神をもち、大局的な考え方の軸をもつこと〟

徳間――なぜ、女優とは何か、みたいな話をしたかといいますと、これは私自身にも内在する問題でもあるんです。私のような実業家にとって、企業とは何か、企業人は何をすべきかという精神をもっていなければならないのと同じことで、そうした大局的な考え方の軸なり希望をもっていないと、マンネリに陥ってしまう。そのためには、つねに視野を広くし、将来まで見通した計画をたてなくてはならないんです。

今、筑波で科学博が開かれていますね。たとえば、その科学を例にとると、科学技術庁の資料による日米の科学技術水準の比較では、遺伝子組み換えとか航空機、ロケットといった方面では明らかに日本が劣る。人工心臓や住宅建設の技術は同等、そして産業用ロボットや半導体製造、磁気浮上列車については日本の技術のほうがアメリカより優れているんです。

藤――リニアモーターカーなどですね。

徳間――そう。科学技術の分野で、日本は世界のトップクラスにあるわけで、今後もますます発展していくでしょう。そして、このことはHBAの諸氏をはじめとする日本のホテルマンにも大いに関わってくることなんです。世界各国から大勢の人々が日本へやってくる。昨年は、ついに来日する人の数が二百万人台に乗ったそうですね。そうした人たちは、みな全国の主要ホテルに泊まる。そのときホテルのバーというのは、彼らを迎える玄関であり、くつろいでもらう客間でもあるわけですね。ですから、バーテンダー諸君も今、盛んに英語やフランス語、ドイツ語などをマスターしようと努力しています。ある意味で、バーマンは日本を代表する人間であり、そうあるべく励んでいるということです。

藤――今日は素晴らしい皆さんのサービスで、心ゆくまでおいしいお酒を味わわせていただいています(笑)。

徳間――料理もおいしいでしょう。この日のために、このホテル・グランドパレスの総料理長豊田譲治さんが自ら腕をふるってくれた特別メニューだそうです。藤さんは、ホテルのバーやレストランはよく利用されますか?

藤――ときたまですが。でも、素敵ですね。とても落ち着ける感じがします。街中ですと、こんなふうには落ち着けません。

徳間――サインをねだられたりするでしょう(笑)。こういうホテルでは、お客さまにゆっくりくつろいでもらうことを大切にしているんですね。だからバーテンダー諸氏も、相手が藤さんだからといって特別扱いすることもなく、一人のお客さまとしてサービスするわけです。

藤――そういう感じですね。とてもいい雰囲気です。街中だとざわざわしていて、こんなふうにゆっくりお酒を飲めませんしね。

徳間――これをご縁に、今まで以上にホテルのバーを上手に使ってください。

藤――ええ、ぜひ美酒をごちそうになります(笑)。

続・美意識、右往左往

グラフィックデザイナー
早川良雄

グラフィックデザインというような、情報産業の一翼としてあまりにも「現在」的な仕事に忙殺される人種にとって、ときにいや常に未来や過去について思いを馳せることは、精神の平衡をキープするうえで大いに大切なことではないだろうか。

そのばあい、ぼくはSF的未来像よりも「過去」のほうにより関心が向く体質(?)らしい。子供のころは、懐かしい原田三夫先生監修の「子供の科学」を「少年倶楽部」や「日本少年」などと一緒に愛読したものだが、いまでいう地球物理学的な教材や月や火星の想像図などが、毎号のように掲載されて幼いぼくに好奇の血をわかせたものだ。しかし、それよりもさらにエジプトのピラミッドやスフィンクスなど「世界の七不思議」式の記事や写真のほうにひきつけられ、人間の古い歴史の営為、その摩訶不思議な魅力に子供ごころを焦がした。

しかし長ずるに及んでは、いったい「自分」とは何なのか、父母から生まれ、その父母にもまた父母があり、彼等は日本という列島の住民であった。自分とは何か?そのアイデンティティを探ることは、とりもなおさず父祖の住みついたこの日本の過去、つまりその歴史を尋ねることであり、ひいては世界の歴史を知ることでもあった。

いまでも旅を志すときは、まず過去の歴史が息づいている土地を選ぶ。それも、でき得れば歴史が具体的な遺構や遺跡として現存している場所を優先させるのだ。ヨーロッパやアメリカを一通り巡ったことはあっても、国内をのぞいてはローマ以外にほとんど遺跡らしいものを見ていなかった数年まえのこと、やっと念願かなってエジプトに飛ぶことができた。

ぼくがナイル河畔に見たものは紛れもなく美しく壮大な廃墟であった。「遺跡」には、自然の風化や人間の暴力などでその原形を崩された幾つかの段階があるが、ある段階から、それは「廃墟」と呼ばれるのではないだろうか。

息をのむようなピラミッドのスケールと量感もさることながら、予想外の力でぼくを圧倒したものは、カルナックやルクソール神殿の巨大な列柱群であった。その後に観た映画「ナイル殺人事件」でも、サスペンスのシチュエイションにこの列柱をうまく利用したシーンがあったが、ぼくはそのとてつもなく巨大な柱列の谷底で、それに相似した風景として唐突にもニューヨークの摩天楼群を思い浮かべていた。

そして同時に、やがて現代文明が滅びたとき、マンハッタンの高層建築群は、この神殿のように感動的な廃墟の美を持つことができるのだろうか、などと考えていた。映画「猿の惑星」の象徴的なラストシーン、チャールトン・ヘストンが馬で往く水際の砂から斜めに突き出ていた「自由の女神」像のことも、そのときふと頭をかすめた。

帰国後、しばらくして、新聞に載った「われらは美しき廃墟をもちうるだろうか」という栗田勇氏の文章を読んだ。ひとくちにいえば、それは滅びの美学の側から現代文明を逆照射した名エッセイで、そこにはぼくが漠然と感じながら、なお思考以前のあいまいさで思いめぐらせていた問題の「答え」が歯切れのよい論調で説かれていた。

失礼ながら、その文章の一部をコラージュして要約してみよう。氏は、古代エジプトやギリシャの廃墟に人間の手の痕跡を認め、そしてそこに人間のトータルな世界観の関与を見、さらに時間と空間の総体としてそれを「美しい」と感じるのである。その前提にたてば『現代の都市建築は、もし機能を失えば―それはただの廃墟であり巨大な廃棄物としかいいようのない、ものですらないものである―それは建築物の形式や材質によるものではない―そのような建築を生みだした文明の本質から結果するものだ』とし、さらに『現代の生産システムはもっぱら生産性を高めるための生産という、人間の関与を排除した―ものにはじまりものに終わるシステムであり、それはひたすら、ものがものを生産しつづける機械的な増殖行為にすぎない』と続き『ものによってものが変形しつづけている無意味な運動に突然停止がおとずれたとき、その廃墟には人類の文明の痕跡が残らないのは当然で、それは単なる自然よりさらに醜い「何か」であるか「何でもない」かであろう』と結ばれている。

これは、以前からのぼく自身のテーマとも重なっていて、おりにふれ江戸の町並みと現代の都市環境を比較しては、もっぱら江戸を肯定し現代のTOKYOに疑問を呈してきた。それには、失われたものへの思い入れもないではないが、大きくは科学文明と人間精神のパラレルな蜜月が危殆にひんしている現代への懐疑でもあった。

建築や工業デザインにかぎらず、近代デザインの理念は機械によるオートマティックな複数生産を条件にしている。そして、人間の心や手がじかに伝わってくることのない無機的なものが、ぼくたちの環境に大きな比重を占めつつある。それはそれで、たしかに生活を快適に便利にしたし、現在進行形の文明の形式として受け入れざるを得ないだろう。

しかしである。ときには現代文明の崩壊というようなペシミスティックな地平から、つまり廃墟に立って現代文明のありかたを考えるようなアプローチも無駄とはいえないのではないか。

地平線綺譚 —— ⑩

BEYOND THE HORIZON

「現地集中思考法」のすすめ

三輪主彦 Kazuhiko Miwa

船乗りシンドバットと作家のウイリアム・サローヤン、そしてトルコの高峰であるアララット山。

落語の三題噺にもなりそうもない組み合わせであるが、私の頭の中では一つの糸でつながっている。ユーフラテス川という大河にかかる鉄橋の袂でお茶を飲んでいる時、突然この三つが磁石に吸いつく鉄片のように頭の隅から引きだされ、一本につながったのである。意識的に一つの事を考えている訳ではないが、突然モヤが晴れて先が見える。アチコチをウロウロしているとそんな瞬間に出会うことが時々ある。私の旅の楽しみの大きな部分なのである。

《シンドバットとバスラの町》

いつものように単純な理由でバスラの町にやってきた。対岸の堤防らしい所にナツメヤシの林が一列に続いているのが見えるが、あとは一画が泥の海。家々があちこちに浮かんでいるようにみえ、どこが川かどこが町か区別がつかない。世界最高気温摂氏五十八度を記録した町なので、さぞかし暑く乾燥しているだろうとの予測はまったくはずれ、一月のバスラは雨季で肌寒く夜はストーブが必要だった。

単純な理由とは、かの船乗りシンドバットが、この港から七回の航海に出、金銀財宝をもって帰ってきたという話を聞いたからである。シンドバットの物語は子供の漫画やお話だとばかり思っていたのだが、バグダッドで友人から借りた千夜一夜物語を読むと、何とこの地が舞台になっている物語であることを知った。マリドリウス版の第二百九十夜目からがシンドバットの物語で、子供の頃聞いた怪鳥ロックや人喰い大男の話が載っている。彼はいつも、もうダメという危険に出会うのだが必ず奇跡的に助かり、おまけに金銀財宝を山ほどもち帰るのである。もしやバスラに行けば、そのおこぼれにでもあずかれるのではと思い、出かけてみた。バグダッドから南へ砂漠の中を五〇〇キロ。バスラだけが水の上に浮かんでいた。まるで〝ノアの洪水〟のような光景だった。チグリス川とユーフラテス川が合流したシャトル・アル・アラブの岸にあるバスラの町は、毎年、水没するという。

「世は神の前に乱れ、暴虐が地に満ちた。神はすべての人を絶やそうと決心された。そして正しい心をもったノアにだけに糸杉で方舟を作るように命じた」

シンドバットの財宝にありつこうなどとは考えていては、とてもノアにはなれそうもない。

この地域、すなわちメソポタミア文明の発祥の地はバイブルランド（聖書の地）であり、ノアの方舟の話は古代アッシリアの都市ニネヴェから発見された粘土板文書にも、ギルガメッシュの叙事詩として記されているのである。神の意志かどうかは別として、大洪水があったことは確かな事実であるようだ。

《サローヤンとアルメニア人》

話は、まったく変わってしまうが、私は高校生のころ、「愛読書は？」と聞かれるとたいて「ウイリアム・サローヤン」と答えていた。ちょっと知ったかぶりをしたい年代でもあったが、代表作「我が名はアラム」という短編集に出てくる人達に惹かれたことも確かだった。まったく素朴で、気まじめなユーモアがある善人達しか登場しないのである。舞台はカリフォルニアの田舎の村。いとこのムラート、伯父のコスロウヴなどアラブやソ連人のような名がでてくるし、アッシリア人のパイロなどというのもでてくる。アッシリアってのは紀元前何千年かに滅亡してるはずなのに。ムラートはアルメニア語で話すのだが、いったいどこの言葉なのか？　サローヤン自身はアルメニア移民の子と解説書には載っていたが、きっと空想の国か、古代の国名からとったものだとばかり思っていた。

《アララット山と方舟》

ところがアララット山の麓の町、ドウバヤスィトにやってきたところ、町の裏山に廃墟になったアルメニア教会を見つけ、実在の名ということをはじめて知った。トルコ人に聞くことはタブーになっているが、たしかに第一次大戦前までは、この地方はアルメニア人の国であり、アララット山は彼らの象徴の山であったという。現在ソ連領内にアルメニア共和国があるだけで、トルコ領内にはアルメニア人はいない。サローヤンの祖先もこの付近から追われていった人達だったのだろうか。

アララット山は五〇〇〇メートルを超える山で、頂上付近は氷河に覆われている。この山の頂上付近にノアの方舟が漂着したと聖書には書かれているという。こんな高い所まで水が来たなんて、と少々疑いの念をもってしまうが、聖書に基づく宗教の人達、すなわちキリスト教、ユダヤ教、イスラム教などの人達にとっては疑いの余地のない事実とされており、多くの探検隊が派遣され、氷に埋もれた方舟の破片を発見したりしている。

私は疑いよりも先に、何故方舟がメソポタミアの地から二〇〇〇キロも離れた山の中に流されてきたのか、メソポタミアの周辺にだって多くの山があるのに、なぜアララット山が選ばれたのか不思議に思ったのである。人によっては、アララットはメソポタミア周辺の小山であるとしているが、不思議であっても、私はやはり聖書にでてくる山は現在のアララットでなければならないような気がしていた。

バスラもアララットもアルメニア人も互いにまったく関係のない体験としてしばらく経過した後、たまたまビレジッキという町を通った。フラト川という大河にかかる鉄橋の近くでお茶をのんでいた時、友人からフラト川はユーフラテス川だと教えられたのである。頭の中の歯車は一気に回り出した。アララット山の近くを流れていたのはたしかフラト川だ。何だ、ユーフラテスの源流はアララットの麓にあるのか。バスラとアララットは川で結びついているんじゃないか。そして聖書の中でこの二つを結びつけたのはアルメニア人だろうと確信をもった。

ノアの方舟に乗ったのはノア夫婦と三人の息子夫婦だった。そして人類は彼らの子孫として繁栄していったという。息子の名はセムとハムそしてヤベテという。セム族、ハム族、は中近東において現在でも有力な民族であるが、ヤペテというのはどこにも見あたらないのである。しかしアルメニアもこそがヤペテの子孫だとする説がある。もし本当とするなら、当然自分達の土地の象徴であるアララット山を聖書の中に入れるべく努力したであろう。この説が有力なのかどうかは知らない。しかし、ユーフラテスの河辺で、私は一瞬のうちにシンドバットのバスラとアララット山をアルメニア人の仲介で結びつけてしまったのだ。

私の突然のひらめきは正しいかもしれないし、逆かもしれない。まあ、たぶん正しくないだろう。しかし一瞬のうちに自分の中でモヤモヤしていた問題にすばらしい解法がみつかったような気がしたことは確かなのである。この瞬間は実に楽しいのである。私の場合、どこかさまよっている時にだけ、こんなことがおこるのである。それはおそらく他のことにわずらわされることがないので、頭の中に余裕ができているせいであろう。私は、この楽しみを「現地集中思考法」と名づけ、エラそうに人に話したことがある。すると「そんなことは別に現地に行かなくても、コタツの中でもできる」と反論された。

「現代人とは体験をせずに経験をする人である」とだれかが言った。自らの体験だけにこだわっているようじゃ何の進展もないし、普遍性もない。先人の体験を普遍化していったものがすなわち文化・文明なのであるから、ひとりよがりの体験など意味をなさない。永久機関などできっこないことが証明されているのに、いまだに新発明だとさわぐ人達と同じだよといわれることもよくある。

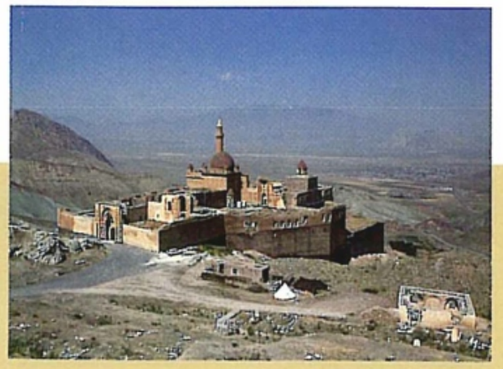
しかし人類全体にとって考えた場合、意味がないことはわかっていても、個人個人を考えた場合どうであろうか。大部分の人達にとって、本で知り得た知識は、自らの経験にはなりにくいのではなかろうか。非能率的ではあっても、追体験をすることが経験になっていくのではなかろうか。他人にはまちがっていることがわかっても、やってみるまでなかなか納得できないものだ。

〝百聞は一見に如かず〟百見は一体験に如かず〟私の一歩は人類にとってたいしたことのない一歩であるが、自分にとってはやはり重要である。短い足で地球を歩きまわり、軽い頭で、まだまだコジつけを考え、楽しんでいきたいと思っている。

ニネヴェの遺跡近くで出会った遊牧民の子供。

「ノアの方舟」伝承でも知られる、トルコの高峰アララット山。

◀バスラの近くにて。
▼アララット山麓の町ドウバスィトのアルメニア教会。



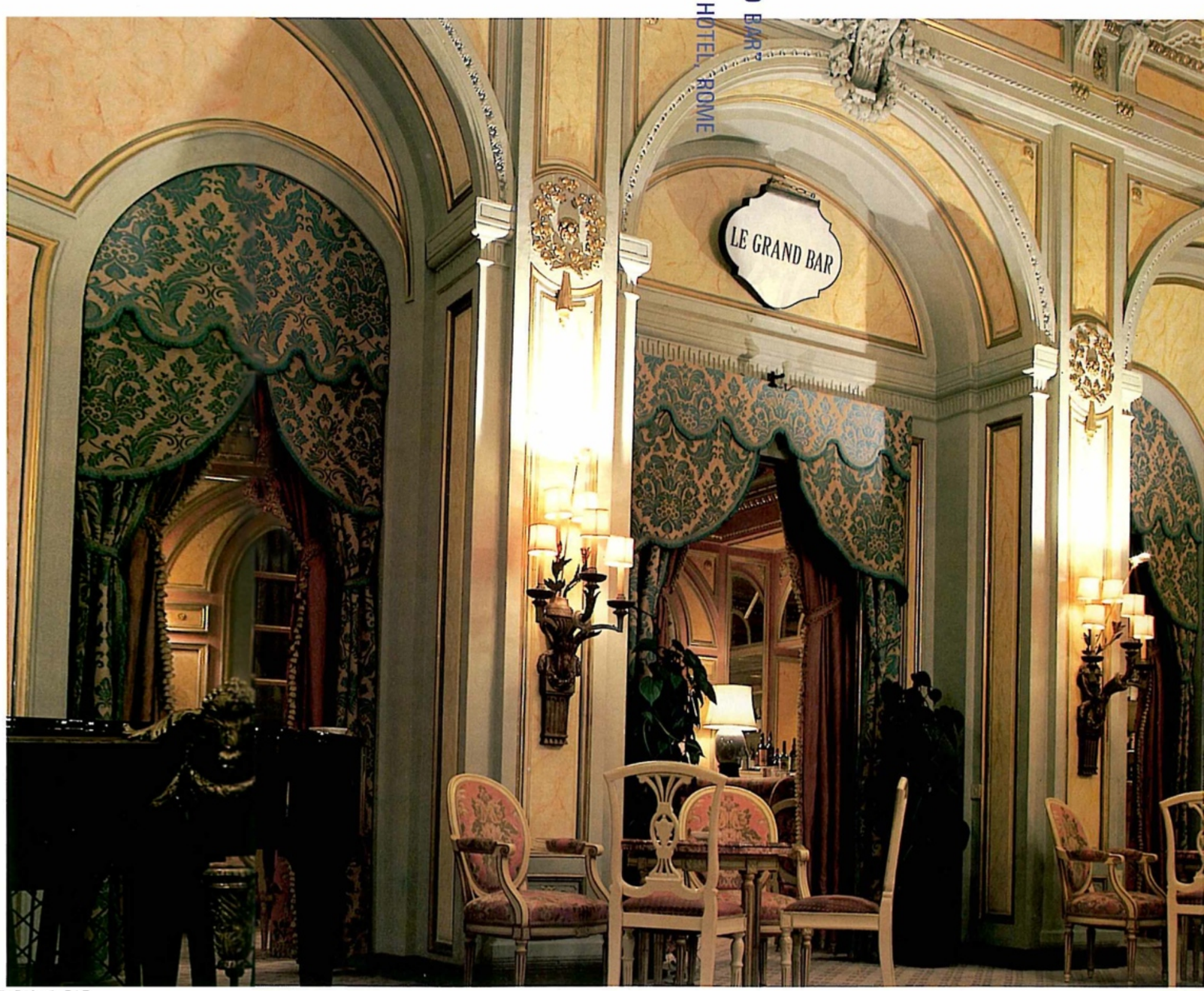
みわ・かずひこ。
1944年、大分県生まれ。
高校教諭のかたわら、
世界を駆ける冒険者のグループ
「地平線会議」、「沙原の会」を主宰。
自ら旅した国も
30数か国を数える。

世界のホテル・バー――⑭

“ル・グラン・バー”

ル・グラン・ホテル、ローマ

“LE GRAND BAR”
LE GRAND HOTEL, ROME



ル・グラン・バーの入口。

グランド・ホテル――その都市の格式あるホテルの代名詞として。

イタリア映画の名作「終着駅」の舞台として知られるテルミニ駅から、中心街に向けてヴィットリオ・エマニュエル・オーランド通りが伸びている。ローマでは比較的広いこの大通りを行くと、ほどなく右手に、めざす〝ル・グラン・ホテル〟が見えてくる。一説には十七世紀の建物ともいわれる重厚なたたずまい、入口の柱に刻印された“GRAND HOTEL”の名が誇らしい。

グランド・ホテルの名は、その都市を代表する格式あるホテルの代名詞として、つとに知られている。オペラ座の脇に位置し、一階には名高いカフェ・ド・ラ・ペを擁するパリの〝ル・グラン〟、ヴィスコンティの映画「ベニスに死す」の舞台となった、ベニス・リド島の瓶美なリゾート〝グランドホテル・デ・バーン〟等々。それらに比して、ローマのグランド・ホテルは派手さでは後塵を拝している感はあるが、〝グランド・ホテルという名前のもつ響き、格式、伝統においては、けしてひけをとるものではない。エクセシオールとともに、ローマを代表する超一級ホテルである。とくに、車寄せから回転扉へ、そして内扉を通じてロビーに入ったときの何ともいえない落ち着きと贅沢な空間は、印象深い。そのゆるやかで端正な構図は、かつて川端康成が愛し、長逗留をしたといえばご理解いただけるであろうか。

人生という名のグランド・ホテル

〝グランド・ホテル・デ・ラ・ヴィタ〟

ル・グラン・ホテルは七階建て、四階から上の四フロアが客室にあてられ、二階と三階はバンケット・ルームとして使用されている。客室数は百六十八室と中程度であるが、この客室数こそが当ホテルの性格を端的に表しているといってもいい。

「私どものホテルは、現在十九あるチーガ(CIGA)・グループの一員であり、同じグループのエクセシオールと同様、経営から販売促進、広告、財政に至るまで、チーガ・グループ本部が運営しています。しかし、双方ともデラックスなホテルですが、当ホテルが他の大きなホテルと違うところは、すべて個人のお客さまを対象としている点です。ですから、サービスの面においてもコンシェルジュを常駐させ、また、お客さまのお望みはどんな小さなことでもこなします。それがプレステージであり、本来のサービスの原点であると思うからです。ここにお泊まりになったお客さまは必ず我々が覚えてますし、一度いらした方はけしてお忘れにならないと自負しています」

と語る、客室マネジャーのアントネッロ・パッセラ氏の言葉の端に、その気概が見受けられる。

ル・グラン・ホテルの創業は、一八九四年一月十一日。今年で九十一年目にあたり、ヨーロッパの名だたるホテルの中では比較的新しい部類に入る。しかしながら、創業当初から、かのホテル王セザール・リッツが経営陣の一人として名を連ね、またチーガ・グループが経営に着手するなど、安定した土壌の上で一気に名声を高めてきた。

その兆しは創業当日にも表れており、当時、ローマの新聞各紙は、ル・グラン・ホテルのオープンを大きく書き連ねている。

「大きなダイニングルームは大理石やすばらしい絵画で飾られ、豪華でエレガントなムード。二百五十名を収容する。ホテルの

ル・グラン・ホテルの正面玄関。

7階建て、ほぼ四角形の建物のル・グラン・ホテル。

内装、家具、リネン類、食器など、すべてイタリア国内で作られた名品ばかり。照明はすべて電気で、全客室に三つのランプが置かれている」

「一月十一日(木)のオープニングには、午後三時から六時までパーティが開かれ、ローマ市内の上流階級の人々、一千人が招待された」

「一月十二日の夜は、午後七時から十六コースにもわたる晩餐会が催され、ローマ市長をはじめ各界の名士、内外のプレス関係者ら、約百五十名が招かれた」

当時の金額で総工費三百五十万リラをかけた壮麗なホテルの誕生は、大いに話題を呼んだに違いない。

それから九十一年、またたく間に名声は築き上げられ、その逸話の主となる幾多の人々が顧客となった。イギリス王室やオランダ王室をはじめとするヨーロッパ各国の王侯、世界の首脳、財界のVIPの来訪、イタリア各地の名家の結婚式等。華やかなところでは、エリザベス・テーラーとリチャード・バートンが好んで投宿したホテルとしても知られている。これらの人々の常宿たりうるのは、まさしく先ほどのパッセラ氏の言葉どおり、プライベートに徹し、満足のいくサービスとプライバシーの守秘をかたくなに徹底してきたからであろう。グレタ・ガルボが主演した映画「グランドホテル」の科白ではないが、

「一つの廊下に百のドアがある。でも、だれもとなりの部屋のことはわからない」

ル・グラン・ホテルを舞台にした時と人の綾織りという風格も、まさに〝グランド・ホテル・デ・ラ・ヴィタ（人生という名のグランド・ホテル）〟のそれである。

ホテルの新しい顔、ル・グラン・バー。

回転扉を入ると、右側にレセプションが、左手にキーカウンター、その奥にメイン・ダイニングの〝ル・ラリー〟がある。そして、さらに内扉を抜けると、広いロビーが眼前に広がり、四、五段のゆるやかなスロープを上がる形で、左手にメイン・バーの〝ル・グラン・バー〟、右手にブッフェ〝ル・パビヨン〟が、ちょうどシンメトリーのような感じで両翼に広がっている。そして、スロープからバーに入るアプローチは、テラス風にいくつかのテーブルが置かれており、その配置が憎いほどのゆとりの演出効果を果たしている。

さて、ル・グラン・バーに入ろうとすると、ドアがないことに気づく。ちょうど入口の四本の柱が扉の役目を果たし（ホテル正面入口のデザインと符合する）、あまり圧迫感を感じさせない造りになっている。カウンターに入ってすぐ右手、奥にテーブル席というレイアウトである。収容人数は五、六十人、営業時間は午前十時三十分から、原則として午前一時まで。午後十一時頃まで入口手前左手にあるピアノがBGMを奏でてくれる。

ところで、このバーはオープンしてまだ一年しか経っていない。以前は、ラ・マスカダというレストランだったところを、ここ数年間の館内の改修工事の一環として見直しを図り、独立したバーとなったいきさつがある。以前のバーは、メイン・ダイニングのル・ラリーの中にあり、こちらは完全なウッド・パネルド・バーだったという。

「名前もル・ラリー・バーといいましてね、三十人ほどしか入れない小さなバーでしたから、いつも満席でしたね。旅の支度を解いたお客さまでいっぱいでした。このホテルには小さすぎたんですが、同時にとても雰囲気もありましたよ」

と、目を細めて懐かしむヘッド・バーテンダーのマウロ・ロッティ氏はバーテンディング歴三十年、ル・グラン・ホテルに入って二十年というベテランである。たいへんアイデアに富んだ人物で、ここのホテルのオリジナル・カクテルは、ほとんどこの名バーテンダーの手によるものである。氏に、数例をあげてもらった。

ル・グラン・バー

「まず、ウォッカ・インペリアル。これは他のカクテルと違って、あらかじめ準備しておく手間がかかります。まず大きなカラフを用意して、バナナ以外の時々のフルーツを切って中に入れます。バナナはフレーバーが強すぎるので入れません。そして、フルーツにマラスキーノを適量ふりかけ、ウォッカで満たします。そして一晩おきます。その間にフルーツのフレーバーがウォッカに加味されます。そして朝になったら——多分、十二時間後くらいでしょう——、カラフごとフリーザーへ入れ、二三時間後、フルーツが凍るくらいになったらできあがりです。ウォッカは凍りませんから。カクテルグラスなどでサーブします。

それから、メイン・ダイニングの名前をとったル・ラリーというカクテルもあります。これはカンパリとチェドラータを同量、そしてレモンを半分絞り、ソーダで満たします。そしてレモンの皮、もしくはオレンジの皮を入れます。見た目にもとてもきれいなカクテルです。

モン・ブランというカクテルは、レモン・アイスクリーム（シャーベットに近い）にウォッカを入れ、シャンパンを満たし、オレンジの皮を入れます。

そして、ロジャー。ホワイト・ラムをベースに、ガリアーノとカンパリを一滴、スイート・ベルモット（白）を加え、ミキシンググラスでステアします」

これらを代表とするオリジナル・カクテルはよく出るという。

また、このバーでは一年中、シャンパンを使ったカクテルを出していることも特徴のひとつであろう。

- ●一・二・三月／〝プッチーニ〟
- ●四・五月／〝ミモザ〟
- ●六・七・八・九月／〝ベリーニ〟
- ●十月／〝ティツィアーノ〟
- ●十一・十二月／〝ティントレット〟

たとえば、〝プッチーニ〟はタンジェリンを、〝ベリーニ〟は桃を、〝ティントレット〟はざくろを使ったものであるが、これらのフルーツはすべてフレッシュのプレッセである。その季節のいちばんフレッシュで熟したフルーツを使ったシャンパン・カクテルなのである。

マティーニは、キー・カクテルである。

このほか、モダン・カクテルも出るという。

「キールやロイヤル・キールなんか出ますね。また、モダンなカクテルということですと、ピスコ・サワーなどは最近よく知られてきたみたいですよ。ピスコはペルー産かどこかのワインからできているもので、グラッパに似ていますが、微妙に違います。グラッパほど攻撃的な味ではありません。色は白か黄色で、これはできた場所によって違うと思います。このピスコを一ショットに砂糖とレモン・ジュース、卵白を落とし、サワーグラスでサーブします。卵白が入ってますので、少し上のほうに泡がありますが……。私たちは、つねに新しいものには気を使っていますね」

しかしながら、とロッティ氏は続けた。

「このバーにお見えになるのは、若い人よりお年をめした方たちです。ということは、酒に関してもかなり年季の入った方々ということになります。ですから、独自の習慣といいますか、飲み方をお持ちのケースが多いのです。いきおい、マティーニとか、そういった正統派がよく出ることになりますね。いずれにしても、シンプルなものでしょう。やはり、クラシックなものといえば、マティーニです。

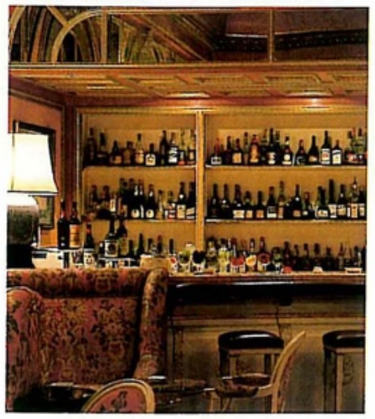
マティーニは、単にカクテルというだけでなく、バーの一つのフラッグ、目安なんですよ。マティーニをうまくつくることができれば、そのバーテンダーは何でもうまくつくることができるし、マティーニがうまくないと、ほかもだめ。いわば、マティーニは、キー・カクテルだと思います」

実は、ロッティ氏の父親もフィレンツェのポンテ・ベッキオでバーテンダーを生業

ロッティ氏の手によるオリジナル・カクテルとピスコ・サワー(左から2番目)。左より〝ロジャー〟〝ピスコ・サワー〟〝ウォッカ・インペリアル〟〝ル・ラリー〟〝モンブラン〟。

マウロ・ロッティ氏
(ヘッド・バーテンダー)

シャンパン・カクテルの〝プッチーニ〟(左)と〝ティントレット〟(右)。



◀年代もののシャンパン・クーラーとシェイカー。

としていた親子二代のバーマンであり、氏自身もローマに至る以前に、イギリス、スイス、ドイツなどで腕を磨いた経験をもつ人物だけに、この断言には重みがある。氏は、最後にイタリア人気質とバーテンディングの面白い"相関関係"を語ってくれた。

「各国を巡って、イタリアでの仕事は、イギリスやアメリカのスタイルとは違うなと気づきました。それは、イタリア人はあまりお酒を飲まないんです。イタリア人は、一日の終わりに酒を飲むかわりに、小銭をポケットに入れて帰ってしまう(笑)。もっとも、食事のときにワインは飲みますが。

つまり、バーテンダーにとってはあまりいい環境ではないんです。ですから、私の仕事は、バーに来た人との間に文脈(中身のある関係)をつくることだと思います。お客さまと話をし、友達になり、そして、そのうえでお酒をサーブするんです。アメリカやイギリスでは大半の人が酒を飲みますから、まず酒を出すことから始まる。でも、ここでは何を出すかの前にすべきこと、考えることがいっぱいあるんですよ。

ですから、イギリスやアメリカのように酒をひじょうに早く飲むこともありませんから、この地でのバーテンダーの仕事は、つねにP　R(パブリックリレーションズ)なんです。一杯の注文までに百語はしゃべらなくては(笑)。

また、海外からのお客さまに対するとき、自分の知らないカクテルを注文されることもありますね。アメリカ人の方によく起こることなんですが、オーダーされたものが、バーテンダー・コンペティションならばだしも、テーブルからやってくる。つまり、自分の好みで知っているものを注文されるわけです(笑)。アメリカでは次々と新しいカクテルが生まれますし、呼び方もいろいろです。ですから、もしどうしてもわからなかったら席に行ってレシピを聞きます。でも、一度覚えたら次はけして忘れません」

真新しいカウンターの上に置かれた、今世紀初めから使われているシャンパン・クーラーやティーポットの鈍い光沢、そしてロッティ氏の気骨――これからもル・グラン・バーを支えていく大きな礎である。

ル・グラン・ホテル自家製ワイン"アドルネット"。

ところで、ル・グラン・ホテルの中庭に葡萄畑があることは意外と知られていない。しかも、そこで収穫された葡萄から自家製の白ワインがつくられている。

かつてローマの七つの丘には、いたるところに葡萄畑があり、ワインづくりが盛んに行われていた。しかし、度重なる戦禍や押し寄せる都市化の波に、畑も次々と姿を消し、街中で葡萄畑を見ること自体が珍しいことになった。そんな時節に、人知れずル・グラン・ホテルの中庭で門番が三十年もの間、丹精込めて葡萄畑、というよりも葡萄棚の手入れをしていたのである。

ある日、そのことに興味をもったマネジャーが、どんな種類の葡萄か試験場に送って調べてもらったところ、ワインづくりにも適していることがわかり、以来、ル・グラン・ホテルのワインづくりが始まった。アルコール度は一一・五度、わら色のドライな白ワインである。

しかし、残念ながら棚の大きさに限度があるため、年間の生産量は六百本あまり。ホテル内のレストランやバーで供されることはなく、あくまでもVIPのギフト用である。ちなみに、ワインの名前"アドルネット"は門番の名前であり、ラベルの図柄は、かつてのレストラン、ラ・マスカダ(仮面)に因んでのものらしい。

メイン・ダイニング"ル・ラリー"のワイン・ストックは、イタリア産を中心に三四千本。

ル・グラン・ホテルのメイン・ダイニング"ル・ラリー"は、正面玄関の回転扉を抜け、左手のキーカウンター奥に位置している。

ここではイタリア各地の料理を中心に、メニューを構成しているという。

「イタリアのどこの地方を中心にということは、とくにありません。どこの地方のものでもお出ししますが、時季によって分けたりしています。チーガ自体がイタリア料理の各地方を代表するものを取り上げてメニューに入れようとしていますし……。それらを地中海料理という伝統の範囲の中に入れれば、そういえると思います。

ローマの周辺ではアーティチョークやラムの料理、パスタではフェットチーネが有名ですから、そういったものをお出しするようにはしています。各国から訪れる方に、ローマではこんな料理がある、これがローマの料理だとわかっていただきたいからです」

と語る、フード&ビバレージ・ディレクターのアゴスティーノ・ステファン氏。これらの料理に合わせて、ワインも三、四千本のストックを常備しているという。うち、七十五パーセントが自国別でいうと、やはりイタリア産が圧倒的に豊富で、次いでフランス、ドイツ産となっており、つねに五十種類ほどがワインリストに載っている。

「やはり、主にイタリアのワインをお出しします。フランスにも、ドイツにもいいワインがありますが、イタリアにもいいワインがありますよ。ブルネロ・ディ・モンタルチーノ、バルバレスコなど高水準のワインも、もちろん置いてあります。

ワインは料理のタイプに大きく左右されますから、たとえばこってりとした肉料理にはピエモンテ地方の赤ワイン(代表格はバローロ、バルバレスコなど)が合いますし、トスカーナの料理にはキャアンティのフルボディがいいですね。白が七割以上と多いのは、ローマ周辺では白ワインが好まれますし、また、気候の関係から白ワインの生産量が多いからでもあるんですね」

これらのワインは、前述のル・グラン・バーでも注文に応じて飲める。

このメイン・ダイニングの件でいえば、ローマにおける迎賓館の役割も果たしている。というのも、ローマには迎賓館的建物がなく、彼の地を訪れた各国首脳はル・グラン・ホテルに宿泊する。そこで、イタリア料理を中心とする地中海料理とは別に、各国の特別料理を供する機会も多い。故インディラ・ガンジー首相が来館されたときには、専任の料理人が随行し、厨房の中で同時に調理する光景も見られたという。

なにしろ、ル・グラン・ホテル創業時はセザール・リッツとともに近代ホテルの幕開きの功績者として名高い名料理人エスコフィエの指導よろしきを得た伝統がある。

取材当日も、オランダ女王が来羅されるということで、オランダ駐伊大使とステファン氏の綿密な打ち合わせが行われていた。

グランド・ホテルの新世紀に向けて、"スプマンテ"がお目見えした日。

ル・グラン・ホテルの宿泊利用者は、ビジネスマン五割、観光が五割という割合。各国別ではアメリカとイタリアがともに約三十五パーセントと互角になっている。

このビジネスマンに好評なのが、ロビー右手のブッフェ"ル・パビヨン"である。いわゆるコーヒーショップではあるが、そう呼ぶにはしゃれた造りで、ブッフェ・スタイルのカフェ・レストランといった色彩が強い。ただし、オープンしているのは週日の五日間だけで、ランチとディナーを供し、週末はクローズドになっている。

一九八〇年代に入り、次々と模様替えを試み、新しい機軸のバーやレストランを誕生させて新たな方向性を模索するル・グラン・ホテル。グランド・ホテルの名残を大切にしながらも、今後の、創業一世紀に向けての新展開が楽しみである。

ちょうど、そのボン・ヴォヤージュを祝すように、昨年のクリスマスにはル・グラン・ホテルのラベルを貼った"スプマンテ"(イタリアン・スパークリング・ワイン)がル・グラン・バーと、ル・ラリーにお目見えした――。

メイン・ダイニング"ル・ラリー"。

アゴスティーノ・ステファン氏
(フード&ビバレージ・ディレクター)

ル・グラン・ホテルの自家製ワイン"アドルネット"。

ホテル中庭にある葡萄棚。

自家製ワインのいわれを記したパンフレット。
表紙はラベルと同デザイン。

ブッフェ・スタイルの
カフェ・レストラン"ル・パビヨン"。

"ル・パビヨン"に用意されたシュガー類。用途に合わせて数種用意するなど、凝っている。

バロン・ドゥ・エル
BARON de L

「フランスの庭園」を滔々と流れる、ロワール川。その上流に生まれた"バロン・ドゥ・L(エル)"。
それは古きよきフランスの心と最先端技術が生み出した、ロワール最高峰の辛口白ワインである。

"プイィ・フュメ"、"サンセール"、そして"バロン・ドゥ・L"。

古来から数々の都市を繁栄させてきたロワール川。この長河は中央大地の東の端セヴェンヌ山中に源を持ち、北上し、大きく西に迂回しながら大西洋にそそぎ込んでいる。フランスを旅するものは、誰でも「絹のような」ゆるやかな大地の表情に驚き、その典雅さを賛えずにはいられないが、ことにこのロワール川流域は「フランスの庭園」とうたわれている。そして、その周辺のいたるところに葡萄畑が作られていることはいうまでもない。河口付近のナントから、上流のプイィ・シュル・ロワールに至る約四百キロの流域は、数々の美しい古城とともに、ワインの古くからの産地としても有名である。

そうした肥沃なる大地に育まれたためだろうか、ロワールのワインは葡萄のもつ本来の風味が心地よく、フルーティでフレッシュ、軽快さが身上である。作付面積も広く、A.O.C.ワインの生産量は第四位となっている。

そのロワール最上の辛口白ワインに、ラドセット社の「バロン・ドゥ・L (Baron de L)」がある。

バロン・ドゥ・Lは、ロワール川上流、中央フランス地区の村、プイィ・シュル・ロワール (Pouilly sur Loire) で生まれた。この村を中心としたロワール右岸では、ソーヴィニヨン・ブランからつくるプイィ・フュメ (Pouilly Fumé) が有名である。ほんの少し緑がからんだ明るい色の辛口白ワインであり、名前の"フュメ"が示すとおり、いぶしたような香りが、それでいて爽やかなアロマが口の中に広がる。マリー・アントワネットはこれ以外のワインは飲まなかったという。また、ナポレオンの食卓にはシャンベルタンの瓶と向かい合って、必ずこのワインが供されていたとも伝えられているが、確かにこのワインには、そうした逸話にもふさわしい味と香りがある。

一方、プイィ・シュル・ロワールの対岸にはサンセール (Sancerre) の村がある。ローマ時代の遺跡や中世の城壁などが残る落ち着いた村であり、葡萄畑はシャヴィニョールの丘に広がる。香り豊かなキリッとした味わいの、辛口の白ワインと若干の赤、ロゼ・ワインを産出している。

ラドセット社では、これら"プイィ・フュメ"、"サンセール"、そしてプイィ・フュメの上級ワイン、"バロン・ドゥ・L"の三種類をつくっている。

新しき良識(ボン・サンス)。一九七三年、ロワール最上の辛口白ワイン誕生。

ロワール地区周辺では、六百年ほど前からワインをつくり始めたといわれているが、このバロン・ドゥ・Lは生まれてからまだ十数年にしかならない、新しくつくられるようになったワインである。

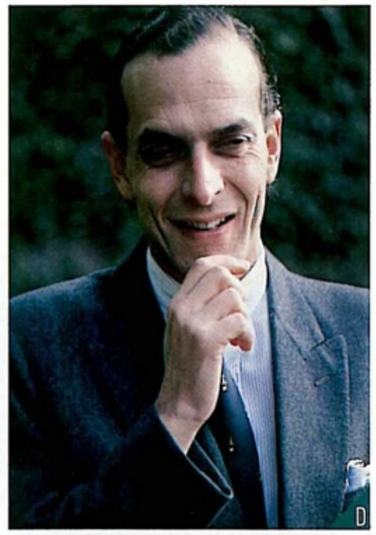
確かに、ワインには"古さ"が尊ばれている。格式のある古典的な銘柄はそのまま「古きよき」フランスの象徴であり、グルメたちは気品高い社会の記憶をそのつど飲みほすのだとさえいえるかのようだが、だからといってこうしたワインの世界が"新しさ"をまったく受け付けないというわけではない。古きよきものへの尊敬を失わず、それぞれの時代に"新しく"あること。それがフランスという国の最も重要な特質である「良識(ボン・サンス)」にかなった行き方であり、事実、十数年の歴史しかもたぬこのワインが、現在ではロワール最高の辛口白ワインとして、パリの一流レストランと称される、ラ

A

B

C

A：シャトー・ドゥ・ノゼ
B：シャトー・ドゥ・ノゼの入口。
C：国道にはシャトーへの入口を示す道路標識が立っている。



D：当主のラドセット男爵。
E：セラーマスターのアンドレ氏。
F：ラドセット社のセラー。
G：建物の地下に設置された最新型の圧搾機。
H：ラドセット社の葡萄畑。
I：周辺には「フランスの庭園」と称される豊かなロワールの景観が……。

セール、トゥール・ダルジャン、アルケストラートなどの三ツ星レストラン、クリヨン、ローラン、ル・ドワイエンなどの二ツ星レストランで愛飲されている。

このバロン・ドゥ・Lの第一号は、一九七三年、ラドセット男爵（Baron de Ladoucette）によりつくられた。

香味豊かで、あとくちにプイィ・フュメ特有のいぶしたような香りが残る。畑はシャトー・ドゥ・ノゼであり、五十五ヘクタールの葡萄栽培面積はすべて直接管理されている。ラドセット社の総生産量は約二千五百ヘクトリットルである。しかし、バロン・ドゥ・Lになりうるプイィ・フュメは、最もよい状態になるといわれる樹齢四十年以上のものしか使用しておらず、一ヘクタールあたりの生産量ははけして多いとはいえず、総生産量の五～七パーセントしかつくっていないという。

葡萄品種はソーヴィニヨン・ブランの一種のみであり、その年のプイィ・フュメの組み合わせの中で最もよいものがバロン・ドゥ・Lになる。現在、市場においては八二年ものしかなく、八三年もののバロン・ドゥ・Lは、今年の秋以降にならなければ市場に現れない。カーブで二年間ねかせるためで、これは白ワインとしては長いほうだ。ちなみに、シャブリの場合は半年である。

〝バロン・ドゥ・L〟の命名は、まさにラドセット男爵の名前そのものにほかならない。ラドセットの頭文字である「L」はまた、フランス語で「彼女（エル）」を意味する。その洒落たネーミングの、シックでシンプルな響き。そして、昔の瓶の形を真似た柔らかく丸みのある外形。「新しき酒は新しき皮袋に」と格言はいう。だが、「彼女（エル）」は新たに、数百年も前の外形を選んだ。ちょうど、ルネサンスが新たに古典ギリシャを選んだようにである。名前と外形にまつわるこうした粋な印象は、品質とともに、「すばらしいロワール・ワインをつくりたかった」というラドセット男爵の想いを十分に反映していたのではないだろうか。

当代のラドセット男爵は、ラドセット家の七代目にあたる。祖先はブルゴーニュの仲買人（ネゴシアン）であった。一七八〇年代、ワインをヌベールで買い、ナントへ送り、そして海外（とくにイギリス）へ売っていたそうである。

余談だが、ネゴシアンを先祖にもつだけに、同社では自社製のフランボワーズ・リキュールも生産している。生のフランボワーズを二か月つける本物で、余計な添加物の類は一切使わず、最後に少量の砂糖を加えるだけという。取材に訪れた際、このフランボワーズ・リキュールを使って、男爵自ら〝キール・ロワイヤル〟をふるまってくれた。

ネゴシアンだったころはナントに家があり、事務所はトゥール・ダルジャンのそばにあった。現在はシャンゼリゼ百二十五番地にあり、自宅もその近くにあるという。

ラドセット家がワインづくりを始めたのは、四代目（当主の曾祖父）が売りに出されていたシャトー・ドゥ・ノゼを葡萄畑ごと買い取ってからである。この人物はバンク・ドゥ・フランスの総頭取でもあった。

一八〇五年には仕込み場（セラー等）が建てられたが、これは今のものより小さなものであったらしい。これを一八五〇年に四代目が立て直し、今のシャトー・ドゥ・ノゼのセラーが完成した。

今日に至るまでには、何度かの危機もあったらしい。第二次世界大戦中には、このシャトーもドイツ軍に接収されていた時期もあったらしい。ドイツ軍将軍がこのシャトーに住み、一家は召し使いの部屋へ追いやられていたそうである。

また、十九世中期の一八五八年ころフランスに潜入したフィロキセラは、全土に恐るべき損害を与えたことは有名である。一説には二十年間もフランスの葡萄の樹を立ち直らせることのできない厄難であったともいわれている。それはここラドセット家においても例外ではなかった。やっとのことで、アメリカの野生葡萄を台木とし、これに従来の欧州種を接木し栽培する方法が発見され、この災難を脱することができたということであった。

進取の最新技術が、バロン・ドゥ・Lをつくり出す。

貯蔵タンクは、はじめ畑ごとに区分されている。十二月に入る前にタンクごとに唎き酒をし、どのタンクのワインとどのタンクのワインをブレンディングするかを決める。こうした中の最高の組み合わせで生まれたものを、バロン・ドゥ・Lとするのである。

ここに至るまでに、最先端技術を駆使していることも、ラドセット家のワインづくりにおける特徴のひとつである。よい白ワインをつくること以外は、ラドセット家では考えていないと断言する。品質のよさを守り、落とさず、そしてよりよいワインをつくる。これが代々守り続けているポリシーであり、そのためには技術革新にも熱心である。古いもののよい部分はもちろん残していくが、新しいことも積極的に取り入れていくのである。

たとえば、ここには木製のタンクは一つもない。すべて金属性のタンクでワインは保存されている。そしてこのタンクには温度調節ができるように、チューブが取り付けられている。これにより発酵時の温度調節が簡単に、そして正確に行うことができるのである。

またセラーと並んで、二階建ての建物が立っている。この建物は二百年前から立っているが、この地下には圧搾機が備えつけられている。トラクターはこの建物の中に入っていき、そのまま葡萄を落とす。そうすると、地下の圧搾機の中へ直接、葡萄が落ちる仕組みになっている。これは葡萄が空気に触れ過ぎると、葡萄液が酸化して黄色く変色してしまうため、なるべく空気に触れさせないようにするためである。ここでは二百年前、この建物が建てられて以来、このシステムをとっている。

この地下に置かれている圧搾機も、もちろん最新型のものが使われている。旧タイプのものとは、その処理能力がまったく異なっている。

果汁は圧搾時に絞り出される以外に、上から落とすときに出る果汁や、葡萄の重なったときの重みで流れ出してくる果汁がある。実は、これらの果汁が貴重で、第一次発酵が終わったときのワインの色、透明度が自然に出るために必要とされる。今までのタイプのものでは、この自然に出てくる果汁を取ることができなかった。

次に、これらの果汁を発酵用のタンクへ移す。第一次発酵は果汁のみで、即タンクに入れて行われる。このときの匂いは、あまりカビ臭くなく、むしろフルーティな香りである。

約一か月で第一次発酵（アルコール発酵）が終わり、十一月初めには第二次発酵（マロラルティック発酵）が始まる。マロラルティック発酵は、毎年行われるとは限らない。このワインはリンゴ酸が強いので、酸を和らげる必要のあるときだけ行う。

また、ソーヴィニヨン・ブラン種のワインはひじょうにデリケートなので、瓶詰保存すると味がくずれるおそれがある。このため、組み合わせの終わったワインは大きな熟成用タンクに入れるのである。

バロン・ドゥ・Lは、このような最新の技術でつくり出された、ロワール最高の辛口白ワインなのである。

ワインは、産出地より、〝誰がつくったか〟が重要である。

ラドセット社のワインは、総生産量の六〇パーセントを国外七十か国（イギリス、アメリカ、ベルギー、オランダ、日本等）へ輸出している。

ラドセット男爵は、「総生産量のうち、最低四〇パーセントはフランス国内で消化されなければならない」と強調する。評価はフランスから始まらなければならないという確固としたポリシーを持っている。まず、国内での評価が高まり、一級の賛辞が得られること。ここにすべての出発点があるという。ゆえに、トゥール・ダルジャンやラセールなどのレストランに〝ラドセットのワイン〟が置いてないとか、ソムリエが知らないなどということはあってはならないことだし、もってのほかだともいう。「フランスでは必ずしも、プイィ・フュメやサンセールといった、ワインの産出地だけが評価の基準になるわけではない。どこの地域のワインかということより、『誰がつくったワインなのか』ということのほうが重要であり、これはフランスの常識である。ラドセットはラドセットの味を守ることが大切なのであって、そのひとつがこの〝バロン・ドゥ・L〟なのである」

と、ラドセット男爵は語る。いかにも、伝統への畏敬と進取の気性とを身につけた彼らしい言葉である。

STIR essay

ロワール紀行

HBA事務局専務理事
今井 清

ドン・ペリニヨンの取材を終えて、パリに戻ったのが午後八時半、その晩はサントリー・パリ駐在の中村氏から招待を受けていたのだが、八時の約束が一時間遅れとなってしまった。

洗顔そこそこに、ホテルを出てレストラン・サントリーに向かうが、この時間、車の駐車場探しは大変だ。どこの道も両側いっぱいに駐車しており、たまたま空いているところは事務所の玄関口のみ、玄関口に車を止めてレストランへと向かう。久々の語らい、楽しい食事を終えたのが十二時少し前、明日は午前八時出発でロワール行きである。心急ぐまま車に乗り込み、中村氏に別れを告げて車を走らすと、何か調子がおかしい。どうしたんだろうと車から降りて点検すると、左側、前後車輪ともタイヤの空気が抜かれている。これは我々の駐車違反に対して、事務所の持ち主が警告をしたものであろう。一車輪だけなら予備タイヤの交換で済むが、二本抜かれてはどうにも動けない。仕方がないので一度別れた中村氏を再び呼び出し、対策を相談した。とにかく営業しているガソリン・スタンドを探し、空気を入れてもらうしか方法がないということになったが、中村氏はパリに赴任してまだ半年、こんな夜半に営業しているスタンドに心当たりがないという。

たまたま中村氏の先輩丸山氏がレストランにおられたので伺ったところ、一箇所あることを思い出してくださり、行ってみてあげようと気軽に協力してくださった。お蔭でようやく復調したのが一時半、中心地の駐車場問題はパリも東京もあまり変わらないと感じながらホテルに帰る。十一月六日(火)午前六時半起床、今朝の空は雲も少なく天候も良さそうだ。今日はブイィ・スウ・ロワールのシャトー・デュ・ノゼを尋ね、城主のラドセット男爵に会い、ロワールの白ワインを代表する、ブイィ・フュメの逸品〝バロン・ドゥ・L〟について取材する予定である。

ブイィ・スウ・ロワールはロワール川の上流で、フランスのほぼ中央、ヌベール市の北三十七キロにある小さな村で、パリからは、国道N・7でまっすぐ百八十キロ余り南下した位置にある。シャトー・デュ・ノゼの庭に立ててある掲揚塔には日の丸が掲げてある。我々の訪問に対する細かい心遣いである。ラドセット氏もシャンゼリゼ百二十五番地の事務所におられたのに、わざわざ駆けつけ、自ら案内とともに取材に応えてくださった。取材後はシャトー内で午餐の準備がしてあり、食前にはフランボワーズを使ったキール・ロワイヤル、食中の白ワインはブイィ・フュメなど料理の献立てとともに心尽くしのご馳走である。シャトー・デュ・ノゼの取材も順調に終わり、ラドセット氏に別れを告げたのは午後四時。降雨の中、五時半過ぎまで取材をし、パリに帰った昨日のことを思えば、田舎の宿とはいいながら、ブイィ・スウ・ロワールの一泊はありがたい。

シャトー・デュ・ノゼから一キロぐらい離れた、なだらかな丘の上からの眺めは一幅のパノラマを見るようで実に雄大だ。広広とした平野、その間に点在する緩やかな丘陵地、見え隠れしながら滔々と流れるロワール川、島国日本と異なり大陸のこうした眺めに出会ったとき、つくづく広いなあと思うのが実感である。ブイィ・スウ・ロワールの村外れを流れるロワール川の水量は、このような上流地帯にあっても意外に多く、音もなく動いているといえるだろう。中学生ぐらいの男の子が、自転車で釣り竿を持って過ぎていく。若い頃の自分がオーバーラップし、懐かしく振り返る。何が釣れるのか聞かなかったのが残念。

ブイィ・スウ・ロワールの村は、自動車ならば二、三分で通過してしまいそうな狭い村であるが、中世からの古い歴史が村全体に溢れていて、その重みのようなものが随所に感じられる。村の中には十宝前後の小さなホテルが四、五軒あり、どのホテルにも玄関脇に意外に良いバーがある。娯楽のない村人達の唯一の憩いの場なのであろう。我々の泊まったホテル・エクドフランスのレストランは小さく、あまり流行っていそうもないので、五十メートルほど離れたホテル・ブウトゥイユドールのレストランに出向いた。ここのレストランはホテルに不似合いなほど広いレストランであるが、なぜか椅子、テーブルは社員食堂なみにならべてある。しかも、お客は我々のほか一組しかない。

ここではエスカルゴ、スープ、魚のムースなど各々が注文したが、そのいずれの料理も塩辛くて食べられない。一人しか働いていないおばさんを呼んで注意をしたが、何の反応も返ってこない。ノレンに腕押しとはこのことである。

宿をとったホテルの外で食事などしたので、間が当たったんだろうと言いながらホテルに帰ると、玄関の鍵がかけられており、いくら呼び鈴を押しても誰も出てこない。裏庭に回り、勝手口からようやく入ることができた。ブイィ・スウ・ロワールの一日は、昼は豪華なシャトーで貴族のような接待を受け、夜は舌が痺れそうな塩辛い料理、しかもホテルから締め出されそうな破目に陥るなどその格差の激しいこと。これも取材旅行のいい経験と、自らの心にいい聞かせながら寝についた。

The 14th HBA Original Cocktail Competition

第14回 HBA創作カクテルコンペティション

大会史上最多の五十五名が参加、実力伯仲の大会。

恒例のHBA創作カクテルコンペティションが、さる三月七日(木)、東京のホテルニューオータニで開催された。今年で第十四回目を迎える当大会は、年毎に盛り上がりを見せているが、今大会はとくに参加選手数も五十五名を数え、大会史上最多だった昨年を一挙に六名も上回るものとなった。そのため、開演時間も約一時間ほど繰り上がり、延べ六時間余におよぶ追熱した大会となった。

会場となった本館一階の「鶴の間」には、今年もテレビカメラが設置され、演壇左手の大型スクリーンに選手の競技中の表情が克明に映し出される趣向である。

審査方法については例年どおり。総合技術点四十点、作品点(カクテルの味)五十点、ネーミング点十点の、計百点満点で覇を競う。また、選手は、当日午前中の抽選で決まった出場順に競技するのも従来どおり。公正を期すため、審査員ならびに観客に知らされるのはこのエントリーナンバーと出品カクテル名だけで、所属ホテル名や選手氏名もいっさい伏せられ、純粋に技術と味のみが採点されるようになっている。

今回、審査をお願いした先生方は次の十名の皆さま。審査委員長の徳間書店社長・徳間康快氏を筆頭に、女優の藤真利子さん、中村晃子さん、マスコミ・実業界からは佐藤國光氏、ジョージ・ポクロフスキー氏、江副浩正氏、清宮 龍氏、渡邊亮徳氏、そして作家の笹沢左保氏、日本ホテル協会事務局から子字晴夫次長といった、いずれ劣らぬカクテル通の方々ばかり。五人一組のローテーションで審査をお願いした。

多彩な材料、二度のシェイクなど、個性化、多様化が目立つ。

正午過ぎから始まった競技は、次々と高得点がマークされ、年毎に実力伯仲、僅少差の争いの様相を呈してきているが、今回もとくに接戦が展開された。

今年の特徴は、色がカラフルになったことや、抹茶や金箔、ココナッツ・フレーバーのリキュールと材料のバリエーションが多彩だったことなど、全体に多様化、個性化が目立っていた。一方、シェイクを二度振るような新しいテクニックも登場した。

司会 沢井慶明 末木明美

一、開会の辞 HBA会長 石井金三郎
一、審査員紹介
一、競技進営規則説明 競技委員長 今井 清
一、選手入場
一、優勝杯返還 前回優勝者 倉吉浩二
一、選手退場
一、模範演技 倉吉浩二
一、競技
一、審査講評 審査委員長 徳間康快
一、成績発表 今井 清
一、表彰 石井金三郎
一、閉会の辞 HBA副会長 桑山為男

4位
大西輝雄(銀座第一ホテル)
「エル・ドミンゴ」(El Domingo)
Bacardi White Rum／Malibu／Pineapple Juice／Grenadine Syrup／Shake

3位
中島敏一(ホテルフジタ奈良)
「ラ・リビエール」(La Rivière)
Beefeater Gin／Blue Curacao Bol's／Creme de Menthe White Bol's／Fresh Lemon Juice／Sugar Syrup／Shake

準優勝
渡辺一也(京王プラザホテル)
「マリオネット」(Marionette)
Beefeater Gin／Amaretto di Saronno／Grapefruits Juice／Grenadine Syrup／Shake／Orange Peel

入賞者ならびに作品名
(敬称略)

優勝
君島孝司
(赤坂プリンスホテル)
「フェアリー・ウィスパー」
(Fairy Whisper)
Bacardi White Rum／Amaretto di Saronno／Framboise de Bourgogne／Fresh Lemon Juice／Grenadine Syrup／Egg White／Fresh Cream／Shake

6位
貴多本昭雄(大阪全日空ホテルシェラトン)
「ファイア・ダンサー」(Fire Dancer)
Bacardi White Rum／Cusenier Kirschwasser／Peter Heering／Lemon Juice／Grenadine Syrup／Shake

5位
田崎 健(ホテルニューオータニ)
「ファンタジー」(Fantasy)
Liebfraumilch／Cinzano Dry／Maraschino／Lime Juice／Sugar Syrup／Grenadine Syrup／Shake／Gold Foil

各賞受賞者ならびに作品名	
総合技術賞	落合富雄(ホテルオークラ)「アナザー・ディ」 君島孝司(赤坂プリンスホテル)「フェアリー・ウィスパー」 中島敏一(ホテルフジタ奈良)「ラ・リビエール」
作品賞	大西輝雄(銀座第一ホテル)「エル・ドミンゴ」
ネーミング賞	吉田俊二(サンシャインシティプリンスホテル)「セ・シール」 小林 任(帝国ホテル)「コメット'85」
佳作 第一作	落合富雄(ホテルオークラ)「アナザー・ディ」

審査の結果、優勝をさらったのは赤坂プリンスホテルの君島孝司選手、昨年に次いで二回目の挑戦で手にした栄冠である。また実力伯仲の結果は、各賞受賞者の同点者が多数出たことでも明らかだろう。

大会終了後、懇親会が隣室に場所を移して行われ、活況を呈した。同会場で、恒例により審査員の方々に今大会を振り返っての感想とご意見をうかがってみた。今後の参考にされればと思う。

藤　真利子さん

「楽しんで審査させていただきました。あれだけカクテルを味わったのは初めてで、途中から味がわからなくなったりしましたが(笑)。一位の作品はとてもおいしかったですね。それにミントのきいた作品が印象に残っています。今、困っているのは、これがクセになったらどうしようっていうことです(笑)」

渡邊亮徳氏

「やはり最後の所作が決まっている人が上位に入りましたね。色、ネーミングともにいいものが多いですが、味は甘いものから辛いものまであって判断が難しいですね」

清宮　龍氏

「楽しかったです。一杯全部飲み干したい作品がいくつかありましたよ。今度、訪ねてホテル行脚したいと思います。審査のポイントは、シンプルな材料でいかに美味しく飲ませてくれるか、そして次にもう一杯飲みたくなる作品かどうかを考慮しました」

丁字晴夫氏

「長年の課題ですが、もっとリズミカルに。そして顔がこわばっているのはどうも……。技術的には皆さん百点満点に近いと思います。技巧点や金箔はアイデア賞ものですね」

笹沢左保氏

「技術の審査ポイントが、質の向上とともに毎年変わってきますね。今年はスピードを基準に審査しました。たとえば氷をシェイカーに入れるリズムですね。味は、同伴した女の子が喜ぶような点を基準にしました」

今大会審査員の方々(五十音順)

丁字晴夫氏
(日本ホテル協会事務局次長)

徳間康快氏(株式会社徳間書店代表取締役社長)

中村晃子氏
(女優)

江副浩正氏(株式会社リクルート代表取締役)

藤　真利子氏
(女優)

清宮　龍氏
(政治評論家)

G・ポクロフスキー氏
(ファーイーストリポータース株式会社代表取締役)

笹沢左保氏
(作家)

渡邊亮徳氏
(東映株式会社常務取締役)

佐藤國光氏
(ニューエンパイヤモーターズ株式会社代表取締役社長)

第14回 HBA創作カクテルコンペティション 出場者一覧

凡例
(出場順・敬称略)
①選手名
②所属ホテル
③出品カクテル名

①真多本昭雄②大阪・全日空ホテル・エラトン③ファイア・ダンサー(Fire Dance)

①日村　豊②青森グランドホテル③クリスタル・スノー(Crystal Snow)

①東　秀信②金沢国際ホテル③ブリーズ・イン(Breeze-in)

①渡辺一也②京王プラザホテル③マリオネット(Marionette)

①木村延則②京都パークホテル③マリリン・モンロー(Marilyn Monroe)

①大井富雄②キャロップ③ユア・ナイト(Your Night)

①増田保雄②ホテルフジタ京都③アクエリアス(Aquarius)

①君島孝司②赤坂プリンスホテル③フェアリー・ウィスパー(Fairy Whisper)

①小泉光二②パレスホテル③スペース・ファンタジー(Space Fantasy)

①大浦明彦②山形グランドホテル③サン・リバー(Sun River)

①北村　聡②丸の内ホテル③タイト・ロープ(Tight Rope)

①益石一央②ホテルリッチ横浜③Uramaro

①田崎　健②ホテルニューオータニ③ファンタジー(Fantasy)

①保田浮雄②京王プラザホテル札幌③楽夢楽人

①成守　茂②西鉄グランドホテル③エル・モール(Elle Mall)

①池田庶秀②都ホテル東京③ナイト・ドリーマー(Night Dreamer)

①吉山弘一②ホテルセンチュリーハイアット③エンドレス(Endless)

①前田隆志②札幌全日空ホテル③マスカレード(Masquerade)

①山中邦雄②東洋ホテル③グリーン・コースト(Green Coast)

①河村昌明②東京プリンスホテル③先駆(Sakigake)

①吉田俊二②サンシャインシティプリンスホテル③セ・シール(Ce-Ciel)

①釜崎治幸②ホテルニューオータニ博多③ファニー・ローズ(Funny Rose)

①有根元球弘②向山国際ホテル③セレナーデ(Serenade)

①山下浩樹②富山第一ホテル③フランタニエール(Printanier)

①深富士雄②京都ロイヤルホテル③アルカディア(Arcadia)

①西村義治②名古屋観光ホテル③コースティング(Coasting)

①徳久洋一②赤坂東急ホテル③雅(Miyabi)

①筑田満明②高輪プリンスホテル③ピュア・レディ(Pure Lady)

①春山三秋②大阪第一ホテル③マスカレード(Masquerade)

①音田三郎②ホテルフラザ③イエロー・バタフライ(Yellow Butterfly)

①中城昌道②京都国際ホテル③鶯(ウグイス)

①小山昭二②八戸グランドホテル③メイ・グリーン(May Green)

①野井真光②ホテルパシフィック東京③マダム・ボンバドール(Madame Pompadour)

①吉田治司②静岡ターミナルホテル③ラ・ルミエール(La Lumiere)

①鈴木博幸②東京ステーションホテル③スイート・ローズ(Sweet Rose)

①冬宮尚雄②ホテルオークラ③アナザー・ディ(Another Day)

①国吉真一②シェラトン沖縄ホテル③マ・シェリー(Ma Cherie)

①小林　任②帝国ホテル③コメット85(Comet '85)

①藤田博之②ホテル日航大阪③ファンタジア・ナイト(Fantasia Night)

①小倉泉側②神戸ポートピアホテル③アクアマリン(Aquamarine)

①名越昌明②東京ヒルトンインターナショナル③スリーピー・ラグーン(Sleepy Lagoon)

①武田　均②名古屋クミナルホテル③カリビアン・クィーン(Caribean Queen)

①林　清司②椿山荘③アミーゴ(Amigo)

①秋山孝一②横浜東急ホテル③ノッキング・ハート(Knocking Heart)

①大久保武②新高輪プリンスホテル③ルナ(Luna)

①萬　親一②大阪東急ホテル③スイング・ラブ(Swing Love)

①高橋頑②キャピトル東急ホテル③カリビアン・ラバー(Caribean Lover)

①菊地浩三②新橋第一ホテル③シューティング・スター(Shooting Star)

①大西修雄②銀座第一ホテル③エル・ドミンゴ(El Domingo)

①桃木　寧②銀座東急ホテル③若草(Wakakusa)

①大西　稔②ホテル仙台フラザ③ミント・アベニュー(Mint Avenue)

①村上　徹②ホテル仙台フラザ③ミント・アベニュー(Mint Avenue)

①橋本昭雄②ホテルフジタ京都③ユア・ナイト(Your Night)

①増田保雄②ホテルフジタ京都③アクエリアス(Aquarius)

①君島孝司②赤坂プリンスホテル③フェアリー・ウィスパー(Fairy Whisper)

①小泉光二②パレスホテル③スペース・ファンタジー(Space Fantasy)

The Artisan SPIRIT

このホテルに、このバーテンダーあり

BARTENDE IN THE HOTEL

きみじま・こうじ／昭和33年、栃木県塩原町生まれ。昭和58年、赤坂プリンスホテル新館オープンとともに40階の"トップ・オブ・アカサカ"のバーマンとして腕をふるう。今年3月、第14回HBA創作カクテルコンペティションにおいて優勝を遂げた。

赤坂プリンスホテル 君島孝司氏

より新しく、より独自に、そして日々よりよく

編——優勝おめでとうございます。この大会も回を追うごとに参加者も増え、みなさんの技術も年々高くなって、そんな中での優勝ですから、大変だったことと思います。

君島——スタッフの方々や同僚に感謝しています。少しでも美味しいカクテルをと、みんなで競い合い、励まし合ってきたおかげだと思っています。

編——君島さんのお作りになった「フェアリー・ウィスパー」というカクテルは、シェイカーを二度振るということでも評判になりましたが、あの作り方はこの大会でもたぶん先例のない試みですよね。

君島——そうだと思います。ベースのカクテルをまず作っておいて、もう一度、卵白と生クリームをシェイクし、その上に注ぐのですが、卵の具合によっては、きれいに分かれないこともあり、上下のバランスがかなり微妙で苦労しました。

編——そのアイデアはいつごろから温めていらしたのですか？

君島——前回の大会のすぐあとです。前回はじつに惨めな結果に終わって(終)。緊張して手が震えたり……。終わってからとても反省しました。次に、もし出場させていただけたら、今度こそと。上に何か浮かべるというアイデアはそのときすぐ思いつきました。ただ、下のカクテルのレシピを決定するのに手間どって、完成したのは結局、大会の三か月ほど前でした。シェイクというのはお酒をより楽しく飲んでいただくための大切な演出ですから、そこで新味を出したいという点もありましたが、味が伴わなければ何にもなりませんからね。

編——そうですね。シェイカーを二度振るという新しいテクニックは、よい意味での積極性から生まれたということですね。ところで、君島さんのいらっしゃる新館四十階の「トップ・オブ・アカサカ」は、なかなかの評判ですね。

君島——いつもほとんど満員で、ありがたいことに平日でも並んでお待ちくださる方までいらっしゃいます。とても光栄に思っていますね。

編——季節ごとのオリジナルカクテルが、またとても好評のようで。独自のものを開発するご苦労も多いこととは思いますが。

君島——ええ。なにしろ、一年に四回ずつ新しいカクテルを作るわけですから。「トップ・オブ・アカサカ」も今年で三年目を迎えますから、もう十作品を世に出したことになります。でも、その分バーテンダーとしてのやりがいもありますね。

編——その際、どんな点に気を配っていらっしゃいますか？

君島——まず、わたくしどものカクテルでは必ずフレッシュ・ジュースを用いることが一つ。既成のジュース類は用いません。ですから、バラエティーに富んだカクテルを作るために、これまでずいぶん多くの果汁を絞りました。ザクロ、マンゴー、キーウィ、パパイア、アボカドまで使ったこともあります（笑）。

編——それは、また珍しい。

君島——白ワインと混ぜて、ミキサーでのばすんです。ともかく、そんなふうに丁寧に、納得のいくまで手をかけて作ることと、あとは、年ごとにその時代の好みをどう取り入れるかという点でしょうか。去年ですと、たとえば焼酎をベースにしたトロピカルドリンクにも挑戦しました。

編——最後に、君島さんご自身は、バーテンダーとしてのモットーとしてどのようなことをお考えですか？

君島——われわれは単に、酒を作るだけの人間ではないということですね。これは、バーテンダーになろうと思った動機とも関係してるんですけれど、この仕事のポイントは、お客さまにとってのプライベートな時間とどう触れ合うかだと思っています。ことにホテルのバーの場合、お客さまの多くは、おいしいお酒とくつろぎを求めにいらっしゃる。そんなとき、ただシェイカーを振っていればよいわけではないんです。お客さまが、今どんな気分でグラスを手にしていらっしゃるか。そこで何か気の晴れぬ様子なら、こちらは努めて明るく振る舞うとか。わたくしどもとの会話がはずめば、その分だけおいしく召し上がっていただけるわけですよね。バーテンダーの応対ひとつで、お酒がおいしくもなれば、逆にまずくもなる。それが、この仕事の魅力であると同時に、難しさだと思っています。

BOOK

for a NIGHTCAP

「もちろんあがって一杯やっていくわね？」と彼女が言った。
She had said,"You'll come in for a nignhtcap,of course?
(『最後の診断』アーサー・ヘイリー著、永井淳訳、新潮社刊)

綿密な考証によって描く、ウエスタンの「酒」の文化史

「大いなる酒場——ウエスタンの文化史」

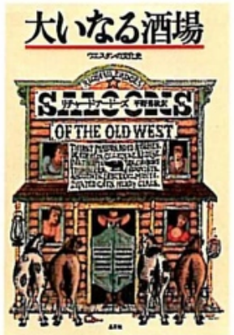
リチャード・アードーズ著
(晶文社刊、定価三千六百円)

西部劇では必ず登場する、おなじみの町の酒場「サルーン」。テンガロンハットのカウボーイや賭博師たちが、スイング・ドアを開けて入ってくる。カウンターにはジョン・ウエイン然とした大男が肘をついてウイスキーをあおっている——。サルーンは男の世界であり、男の夢と希望と挫折と熱気の吹きだまりであった。

著者リチャード・アードーズは本書の扉でこう書いている。

「サルーンは、あらゆる男にとってあらゆるものを意味した。酒を飲む場所であると同時に、飯屋、ホテル、風呂、賭博場、ダンスホール、売春宿、床屋、裁判所、教会、社交場、政治の場、決闘場、郵便局、スポーツ競技場、葬儀屋、図書館、ニュース交換所、雑貨屋、アイスクリーム・パーラー……また映画館の前身でもあった」

ブランデーを船倉に満載して新大陸にやってきた移民たちが、西へ西へと開拓精神にあふれて突き進んできたとき、その歴史を刻み込んだサルーンは、貴重な語り部であるといえる。



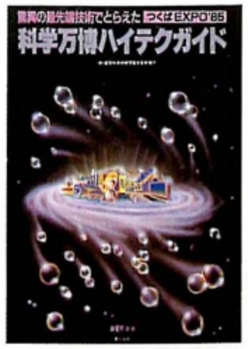
本書は、さまざまなエピソードを織りまぜ、綿密な考証で描く「酒」を巡じてのウエスタンの文化史の労作である。

ところで、増訂ウエブスター辞典によれば、「サルーン(SALOON)」とは、フランス語の「サロン(SALON)＝来客をもてなすための部室、名士の定期的会合、芸術作品の展示会場の意」の綴り違えとか。ご存じでした!?

バイオテクノロジーをはじめ、最先端技術をわかりやすく解説

「つくばEXPO'85 科学万博ハイテクガイド」

(オーム社刊、定価千八百円)



今号巻頭特集のバイオテクノロジーや、ステア対談で徳間康快氏が話題としていた最先端技術の数々が、今日、大きな関心を集めている。折から、筑波学園都市では、「つくばEXPO'85科学万博」(三月十七日～九月十六日)が開催されており、毎日のようにテレビや雑誌、新聞などで脚光を浴び、二十一世紀の未来が、もうそこまできているような感じである。

が、各種最先端技術の個々の認識となると、はたしてどこまで理解できるものかどうか。光ファイバー利用の太陽光集光伝送装置、水気耕栽培、高品位テレビ、近未来ロボティクス、ショウスキャン映像、ルミノプリント、全天周立体映像、双方向オンライン、常電導磁気浮上システム、そしてバイオテクノロジー……!?!?

映像、通信、エネルギー、エレクトロニクス等、科学博に出展された日本の誇る最先端技術を一堂に会し、わかりやすく解説した異色の科学博ガイドブックが本書である。このゴールデンウィーク、夏休みに「近未来体験」を予定されている方には必読の一冊だ。

※『ステア』に関するご意見、ご要望およびお問い合わせは、左記の住所宛てに郵送くださいますようお願い申し上げます。

●〒162 東京都新宿区市谷加賀町一—一二
大日本印刷㈱CDC事業部
「HBA・ステア編集室」行

表紙のプロフィール

久世アキ子(イラストレーター)

一九四五年、長野県生まれの神奈川県大磯育ち。武蔵野美術短期大学商業デザイン科卒。卒業とともにフリーランスのイラストレーターとして各方面で活躍を始める。一九六九年の鈴屋銀座みゆき通り店における個展を皮切りに、広島・大分の法華クラブ、池袋西武百貨店「アトリエ・ヌーボー」、ワコールアートスペース、新宿ルミネスクエア、ディスコ玉椿等の多彩な空間で個展を開催。一九八〇年には、西独国際カレンダー展にて金賞を受賞した。

一九八四年には自らのオフィス「パティ」を設立、青画廊でも個展を開催。今年も「アートEXPOジャパン」への出品、六月二日～九日には再び「ワコールアートスペース」での個展と精力的な制作活動を展開中。また、キャラクターデザインの分野でも活躍中である。

本年、一九八五年のHBAカレンダーの十一月を手がけている。